

---

# バカとテストと召喚獣 ~異常者と転生者と?~

たぬく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～異常者と転生者と～

### 【Zコード】

Z9602S

### 【作者名】

たぬく

### 【あらすじ】

雄二と翔子の幼なじみである五十嵐 達也。

彼がAクラスの代表になった事でイロイロと物語の歯車が狂っていく。

・・・とか言いながらも原作沿いだけど(汗

あ、いじめんなさい。クラス間違えました（前書き）

初めましてなべと母ちゃん（<O>）＼

最近、このサイトに登録した初心者です。

未熟者なので是非感想で「」指導下さい。

では、さっそく（<O>）＼

あ、こめんなさい。クラス間違えました

「」は文月学園。

科学とオカルトによつて開発された召喚システムを取り入れた試験学校である

そんな学園の立派な校門の前に俺はやつてきた。

・・・とまあ客観的な冒頭だが、実は新一年生であつたりする

「おはよひびきます。鉄人先生」

「五十嵐、相変わらずお前は・・・まあいい。

遅刻、ギリギリだぞ」

ため息を着いたいがつい男、西村先生、通称鉄人に一通の封筒を渡された

ちなみに鉄人というあだ名は先生の趣味がトライアスロンだから、  
という理由らしい。まあ、そんな訳で俺もそれにあやかつてる訳だけど。

「？翔子からのラブレターですか！？」

「はあ・・・クラス結果だバカ。速く行け。さもなくばホームルームに遅れるぞ」

またこの学校は一年、二年の終わりにおける振り分け試験の結果によって新学年のクラスが決まるのである。

「・・・Aか」

ちなみにA～Fまでのクラスがありテストの成績順に振り分けられるのだ

「翔子は？」

「知りたいなら早く自分で行って確かめろ」

俺の問いに鉄人は頭をボリボリとかきながら言つた

「了解」

「失礼します」

「あ、五十嵐君来ましたか」

最早ホテル並の教室に入ると前に立っていた女性、高橋女史が声をかけてきた

「はい。自己紹介は？」

「あなたからです」

「トーリーとまっ..」

「西村先生はおっしゃつていなかつたんですか？  
ご想像通りあなたが首席です」

・・・ああそりうですか

「それじゃ初めまして、俺の名前は五十嵐 達也。  
このクラスの代表を務める事になつた。  
呼び方は代表でも五十嵐でもどちらでも良い。  
一年間よろしく」

至極当然のような自己紹介にクラスが盛り上がる（主に女子）

ん？あれは・・・翔子。

やつぱりAだつたか。

よかつた

翔子に向けて笑いかけると、あつちも笑顔を返してくれた。

『一今私に笑顔を！？』

『違うわ！私によー』

『五十嵐君、笑顔も素敵』

・・・う、そんなに俺つて変な顔かな？

騒がれるほどじゅないはずなんだけど・・・

「静かに。」

高橋女史の声で騒がしくなりかけた部屋が静まる

「改めましてこのクラスの担任になります高橋洋子です。まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある生徒はいますか？」

高橋女史は生徒達を見回すが、手を挙げる者はいなかつた。

・・・まあ、これだけあって不満がある奴がいたら少し感覚がおかしい気がするけど。

「無いようなので安藤さんからお願ひします」

「はい。安藤陽子です。趣味は・・・」

て言つた俺つていつまで前に立たされれば良いの？

悪行をしたみたいで氣分悪いんだが・・・

「私は木下優子。得意科目は現代文。Fクラスの弟と似てますがあまり間違えないでほしいですね。一年間よろしくお願ひします」

「・・・霧島翔子。得意科目は特に無い。一年間よろしく」

「一年の最後に転校してきた工藤愛子だよ。得意科目は保険体育か

な。

「一年間よろしくね～」

「僕の名前は久保利光だ。得意科目は特に無い。  
一年間よろしく頼む」

安直な自己紹介を各自が終えていく。

はつきり言って自己紹介より実際関わった方が親交も深まる訳だし、  
名前言うだけでも良いんだよな。

時間は過ぎ・・・

「えっと俺の席は・・・

「ひつじよひつち」

HRを終えて高橋女史が教室を出た後、自己紹介も終わつたので辺りを見回し席を探していると声がかかつた。

いかせん、かなりの広さの為予備の席の割合も少なくは無いのだ。

「えっと君は木下さんだったつけ？」

「ええ。木下優子よ。  
よろしくね、代表」

「五十嵐達也だ。

あ～、木下さん。やつはああ言つたが代表はやめてくれ俺に代表つてのは合わない。翔子の方が全然似合つ

木下優子（以下優子）は俺と翔子の顔を交互に見てから苦笑いして頷いた。

「まあ自覚があるんだから良いけど、笑つちやつたのは・・・お仕置きが必要かな？」

「へ　@#　つ！？／＼

耳元でせつと囁いてみる。女の子はいつの苦手なんだよなあ　ｗ  
ｗ

「・・・達也。それ以上は許さない」

「分かつてゐる」

とりあえず「冗談だつて事を木下さんにこも伝えておく

「せういえば五十嵐君は霧島さんと知り合つなの？」

れつかも前で呼び合つてた事を言つたいのか？

「ああ、幼なじみだよ。幼なじみ。小学生の時からのな

『なんだあ～』

『よかつたのかな』

『いや、まだ分からな～よ～?』

???

なんで周りの人も一齊に頷いてるんだ?

「えつと五十嵐君」

「君は・・・工藤さんだよね」

「うんうん。ずばり聞きたいんだけど霧島さんと五十嵐君は何を会つてるの?..」

「そうだつたら良いんだけどなあ～（願望）  
まあ、いーや

「いや、だから俺達はただの幼なじみだつて」

「そうなんだ

ホツと達也達のやつ取りを見ていた（女子）生徒達が安堵のため息をつく

「それじゃあボクの事、愛子って呼んで?ボクも名前で呼ばせても  
いいから」

な、なんだと!?

な、なんなど!?

いや落ち着け、KOO・・・COOLになるんだ!

「（）」は好印象を狙つて笑顔で、良し、頑張れ俺！

「ああ、よろしくな愛子」  
「（）」

「う、うん。よろしく

引かれた・・・だと？！」

「・・・達也。話がある。着いてきて」

「え、ああ。わかった」

『・・・・・』

『・・・・・』

『・・・・・』

『・・・・・』

「えっと大丈夫かなあ？」

「きっと大丈夫よ・・・多分」

廊下から聞こえてくる声にびく反応して良いか困るAクラスの面々であった

「え～、では五十嵐君。自衛隊の存在が違憲であるか国会で議論されている理由とあなたの意見を言って下さい」「はい。まず自衛隊は日本国憲法九条の『戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認』において国の戦力に当たるのでは無いかと言つ議員の意見があるのが議論が行われている理由で、

私の意見としては、自衛隊は元々憲法の改正を求めたアメリカが創設を要求した警察予備隊が原点であるからして、また最低限の自衛

目的の戦力まで憲法では否認していない。この一つから自衛隊は違憲では無いと判断します」

「なるほど。筋が通っている素晴らしい意見ですね。確かに自衛隊の原点である警察予備隊は朝鮮戦争の期間中にアメリカが創設を要求しました。

皆さん、この点はなるべく覚えておくれとい。」

では、五十嵐君着席して良いですよ」

「はい」

社会担当でもある高橋女史に着席を促されて自分のリクライニングシートに座る

「・・・流石」

「どうも」

地獄の5分休みを終え、俺達は一時間目の授業に入っていた。  
なにも初日から勉強しなくても・・・

「そういえば達也。何かFクラスがDクラスと試験戦争を始めるつて噂聞いた?」

「・・・あの間に聞けたと思つか?」

そう俺が聞くと優子は苦笑いしながら首を横に振った

あの間にについては、話を分かつてくれると嬉しい

ちなみに優子が俺を名前で読んでいるのはあの間にあたるモノを終えた後に愛子と同じように頼まれたからだ。

その後、また数分間目が見えなくなつたのは言つまでもないだろう

あ、あと久保にも改めて自己紹介された。

なんでも彼は振り分け試験で学年3位だつたらしく、お互い頑張ろうという事だつた。

あ、そういうえば久保君で思い出したけど姫路さんはどうしたんだろう?

彼女もAクラスレベルだつた気がしたんだけど・・・

休み時間に翔子に聞いてみるか

「Fクラスが・・・ねえ」

雄一の事だ。翔子がいる訳だし多分このクラスを狙つてゐるんだろう。しかし、進級早々油断しているDクラスなら倒せるかも知れないけど、狙われているとわかつて警戒してゐるクラスを倒すのはFクラスの戦力的に難しいんじゃないのか?まあ、雄一がどう動くか見物つてどころかな?

「どうしたの?気になる事でもあつた?」

「いや・・・今はとにかく授業に集中しよう。ウチに仕掛けてきたらその時はその時だしな」

高橋女史がチラチラとこちらを見ていたので、先に話を終わらせて授業に意識を移す。

その時つて言つても、ウチに仕掛けてくるはずもないって油断している奴等がいるつてのは修繕しなきゃ駄目な点かもな。

昼休み・・・

「やつじえば翔子。姫路がどうしたか知つてるか?」

「・・・浮氣は許さない」

「いや、待て違うんだって!聞くだけだからースタンガンはやめて!本気と書いてマジで!」

必死に説得してどうにか右手に持ったスタンガンを收めても、ひつてか翔子はどうせつてあんなもの調達してんだ!?

「・・・絶対?」

「ああ絶対だよ」

「・・・なら良い。姫路さんは振り分け試験の時に体調不良で早退したみたい」

「へえ~。それは運が悪かつたな、彼女も」

あ~、姫路さんは見てるだけで癒されたんだけどな~

「・・・達也。浮氣は許さない」

「ま、待て！なんで心が読めるんだ！？じゃなくてスタンガンは危険過ぎるって？ぎゃあああああ！」

薄れゆく意識の中で翔子が嬉しそうな笑みを浮かべていたのを最後に視界に入れて、俺の意識は無くなった

「ん・・・」

知らない天じょ・・・今朝見たような天井？

「・・・起きた？」

「ああ・・・」

翔子にスタンガンで氣絶させられたんだっけ  
しつかし、なんでこんなに顔が近いんだ?  
・・・まさかこの頭の下の柔らかいモノは！？

「膝枕はイロイロな意味でマズイって！！」

バツと足と上半身を前に動かしてそのまま、前方に着地する

「・・・達也。また寝て？」

「待て！ 疑問形なのに元の手のスタンガンせぬかしいつ ハザード ああ  
あああ…！」

誰か助け…

「ん…はー三度同じ手はくわないぞーつ ハ愛子へ」

「うん。 憎い反応だつたよー」 起きた瞬間頭の後ろに感じた柔らかいモノに反応して、瞬時に立ち上がり間合いを取る

「なんでお前が…？」

翔子は？

「むつ。 ボクじゃ嫌だつたのかな？」

「こやかじやなくてだな！ 翔子に気絶させられたからつづきつ…」

・

「フフッ。 そんなに慌てて訂正するなんて可愛いなあ～

う…・嵌められただと。

あ、でも可愛いってのは嬉し・・・ゲフンゲフン男はカツコイって言われなきや駄目なんてい！

「えつと翔子は？」

愛子はからかうのを失敗したからか少し頬を膨らまして俺の背後を指差した。

「イケメンは公共の財産です！.. 独り占めは良くありません」『私達にも祝福を！..』

『イケメン万歳！..』

『幼なじみだけが優遇されるのは不平等よ！..』

『IJの世界に生まれてよかつた！..』

「・・・・・」

対峙する翔子と般若のお面を被ったクラスメイト達

翔子の手にはスタンガン

クラスメイト達の手には大振りの鎌

「えつとお・・・なあ愛子」

「ん？ 何かな？ 達也君」

「聞きたいんだけどさ、あれ全員つかのクラスの奴らだよな？」

「そうだね」

「うーんってAクラスだよな?」

「AAA団つて壱ツチームなんだつて」

「一番前の般若つて確か佐藤さんだよな?」

「うん。多分そうだよ」

初見はメガネで清楚な女性だったんだけどなあ（遠い田）

・・・一言言いたい。

みんな・・・馬鹿ばっかです

「・・・達也は誰にも渡さない」

「そんな事を言つて独占するなんていけません」

「・・・達也はメガネつ娘は趣味じゃない。だから幼なじみも含めて私が有利」

「あ、うん。それならボクが膝枕してあげる

「・・・もう嫌だ。これは夢なんだ。愛子、俺寝るから

それから俺は夢が早く覚めること神に祈つてから意識を落とした。

数分後達也の悲痛の叫びが学園に響いたのは言つまでもない

・・・お腹減ったよ。パトラッシュ

結局昼食も採れなかつた達也君だった

あ、いじねたなせこ。クラス間違えました（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

亀更新になりますが精一杯がんばりますので温かく見守って下さる  
と幸いです。

## 異常者、転生者に会つ（前書き）

えつと第2話です。

1話同様、文法又は漢字が間違つていたなどの指摘の感想くれると嬉しいです。

ちなみに異常者はあくまでもめだかボックスとは一切関係ないイレギュラーなので悪しからず。

## 異常者、転生者に会つ

「ではこの問いを・・・」

ピンポンパンボーン

あの後昼食も摂ることも出来ず、そのまま午後の授業が始まり、残る授業はこの数学一つになっていた。

数学担当でもある高橋女史が教鞭を振るい、適度な緊張感の中、授業が行われている。

『船越先生、船越先生』

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の話し合いがあるそうです』

「　　・　・　・　・　・　・　・　・

「そんな・・・吉井君。それなら僕を・・・」

「あ、笑っちゃいけないの？無言になる意味なんてない！皆、笑おうぜ！」

なんて考えてみるが、とても言えるはずがない。  
あ、ついでに後の人にはスルーします。

俺の辞書に同性愛者なんて文字はない！

「・・・」の問いを久保利光君、答えて下さい。

久保君ー?」

「は、はいーえつと・・・」

・・・吉井明久だっけ?

確かにFクラスにそんな奴がいたような気がする

つて事は召喚戦争の戦略かなんかだったのか。  
だがまさか・・・あの船越先生を呼び出しどは・・・。

雄一にも面白い味方がいるみたいだな。

吉井明久か。覚えておいつ

「優子、ちょっとといいか?」

「え?今、授業中なんだから短くしてね」

一応隣の席(とこづかのっこクラス)なので、優子は少し勉強の手を止めるところに用を仰いだ。

「ああ。えつとFクラスが今召喚戦争をロクラスに行ってるんだよな?」

「ええ。今の放送もそれがらみのはずよ。でもそれがどうしたの?」

「確かお前の弟はFクラスだつたよな?それとなくで良いからいつらの戦力を聞いてくれないか?」

「・・・？別に良いけど私達に戦争を仕掛けてくるなんて——」

「ありえない。訝しむよつと優子はさうで言葉を切った。

「そんな油断からは何も生まれない。備えあれば憂い無しだ」

「それだけ言つて俺はフツと笑つた。

優子はそれに数秒考える姿勢を見せると仕方ない、と頷いた。

「ありがとう。それじゃ、よろしく頼む

「ええ。わかつたわ」

さて、そろそろ授業も終わるし下見にでも行つてみますか。

「元しても召喚戦争ね~」

Fクラスに向かう途中、Dクラスへの道を塞ぐ連中と鉢合せた。

他クラスからの干渉は戦争中は無くなっているので、武力行使することは出来ずその場で見学することとした。

「Fクラスが来たぞ！例のアイツだ！！」

Dクラスの方から一人の生徒の声が廊下に響く。  
その声を聞くや否や廊下を通せん坊していた生徒が教室内に走つて  
いく。

・・・これじゃあFクラスの戦力がDクラスに簡単に入れるじゃん  
そこまで追い詰められているって事なのか？

・・・まいーや

Dクラスの生徒がその場を後にした理由を考えてみたが、すぐに必  
要無い思考だ、と振り払った。

俺はそのまま歩を進めてDクラスの教室に足を踏み入れた。

「Fクラス、姫路瑞希。Dクラス代表に現代国語で召喚戦を申し込  
みます！」

「は、はあ。どうも・・・」

『試験召喚！－！』

現代国語

Fクラス 姫路瑞希

339点

VS

129点

Dクラス 平賀源一

「え？ あ、あれ？」

「『』、『』めんなさい」

姫路の召喚獣は素早い動きで一撃の下、Dクラス代表の召喚獣を一閃した。

『Dクラス代表平賀源一 討伐！』

『戦争終結！－！』

西村先生がどこからか現れて、その張りのある声が教室内に響いた。

「「「「よつしやああ－－」「」「」

Fクラスの野郎共の野太い歓喜の声に包まれるDクラス、そして補習室。

「す、すいません」

「いや、謝る」とはない。Fクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ

「まあそつ勘違いするな。Dクラス代表」

「・・・どうした事だ? 坂本」

幻聴を聞いたように平賀は、坂本に視線を向けた。  
それに坂本はフツと笑う

「言外無用で頼むが、俺達の目標はこのDクラスなんかじゃない」

「あのAクラスだ・・・か? 雄一」

「つー?」

突然の声にその場にいた全員が、声の聞こえた教室中央に顔を向けた。

「・・・達也」

忌ま忌ましく眩く雄一に小悪魔のような笑みを達也は向ける。

してやつたり

とでも今にも言こううだ

「久しぶりの再会にそんな不快な顔すんなよな。

俺でも少し落ち込むぞ?」

「知るか。つてかお前は自分で言つてる時は落ち込む奴じゃねえだろ？」「

「ハハツ、違いない

嫌々ながら話す雄一に対し、笑う達也と呼ばれた男子生徒。周囲の連中は状況把握もままならなかつた。

『いつからいたんだ！？あいつ』

『幽靈だつたりして・・・』

『おいおいまジカよ・・・』

『テライケメン氏ね』

『テラ氏ね』

『リア充爆発しろ』

『リア発しろ』

Dクラスの連中はまだしも、Fクラス連中は不吉な事を考えていた。

「ま、まあ話は戻るけど、やつぱりAクラス狙いだった訳か

「落ち込むなよ。Fクラスじや日常茶飯事だ」

「お、おつ。つは！」

「雄一ー俺は落ち込んでなんてないんだからなー」

「そのところは勘違いするなよー！」

「ああ、分かってるよ。お前はすぐに落ち込むからな」

「だから落ち込んでなんかねえよーーー。」

達也は身を乗り出して雄一に反論する。

といつても雄一はどこ吹く風といった様子であるが

「えへっと雄一。この人は…どこかで見た気もするけど…・・・

「・・・気になる」

「ウチもどこかで・・・」

三者三様似たように首を捻る。

ちなみに明久は今朝見ているはずだ。

「ん？ああ、紹介がまだだつたな。Aクラスの五十嵐達也だ。雄一  
とは幼なじみって関係だな。よろしく頼む」

「　　え、Aクラス！？」

自分達の作戦の危機に雄一以外のFクラス連中は驚愕の声をあげる。

何か不都合でもあつたか？・・・思い当たるとしたら、狙いのAクラスに所属する生徒に狙つてるのをばれて良いの？つてどこか？

雄一の狙いがウチだつてのは翔子も気づいてる訳なんだけど・・・

まいーや

「安心してくれ。俺はクラスにぱりすつもりは無い・・・多分」

「凄く不安なんだけどー。」

「まいーだる。それより君は?」

「あ、血几紹介がまだだつたね。僕は吉井『バカ』だよ。つて雄二ー!言葉被せないでよ!」

「あー、あの吉井バカ君ね。この間の放送は驚いたよ

「シャアアアアー!雄二の馬鹿やうおおおーー!」

ズサツズサツと雄二の後ろの壁にカッターが一個突き刺さる。

ああ、自分の意思じゃ無かつたのか。・・・つまんない

「声に出てるからねつーー!」

「おつと失礼。許してくれ。つい本音が出ちました」

「笑顔でそんな事言わないでよー?余計悲しんだからねー?」

右手に雄二に向けていたカッターを初対面な奴に投げて良いものか、と握りしめる明久。

僕はFFF団の連中とは、540度違うんだよーー!

とは、後の明久談。

一応、一回転して180度だという事にびっくりだ

まあ、とりあえず

「さつきから俺を奇異の目で見てるそこの君。  
俺は珍獸でもなんでもないんだけど何か？」

スッと明久から視線を外し、一人だけ違う感情を剥き出しにしている人物に向かた。

驚愕

その言葉に彩られた顔が不屈にも達也への行動に変わった。

「・・・何すんだよ？」

突然、青髪の男・・・は達也の腕を引いたのだ。

突然の出来事にその場にいた青髪のそいつと達也以外はついていくない

「話があるんだ・・・大事なお話」

「・・・分かった。雄一、少し皆を連れてFクラスにいてくれ。

先に帰りたいなら先に帰ってくれても良い」

こいつの目から推測するに・・・

なんて少年ジャーブの王道バトルの主人公の師匠役のような真似は

出来ないが、嘘は言つてそういうのは見えない。

だが重要な話つて何だ？

一見女にも見えるけど、男子用の制服だし  
・・・まさか久保君と同じ？

ブルッ

考えたくないぞ。

初めて会つたんだぞ？  
つて事は一目惚れ！？

やめろっ！――何を考えているんだ！？俺！？

いつものように考える事を切り替えてだな――

「まず、单刀直入に聞きたい。君は六道輪廻を信じるかい？」へ?  
思考が戻り周囲を見回すともう部屋には青髪と自分以外いなくなつ  
ていた。

「六 駄さんか誰かですか？リボンの・・・」

「！知つてゐるつて事はやっぱり君も転生者なんだね！？」

転生者？知つてゐるつて事は？毎週日曜朝に絶賛放送中だぜ？

「転生者つて？」

「えつ？違つ・・・の？」

「俺は六道輪廻があつたとしても、前世の記憶があつたりはしないぜ？」

「え・・・？ 本気と書いてマジで？」

「ああ・・・」

『・・・・・』

一人しかいないロクラスの教室を数秒間、悲壮感漂う沈黙が支配した。

青髪の奴の背中には冷たい汗が流れていった。

「あー、一つ聞いていいか？」 「・・・うん。予想は出来てるけど・・・」

「それじゃ遠慮無く。お前には前世の記憶があるんだな？」

面白いモノを見つけたように笑う俺の問いは、青髪以外の奴が聞いたとしたら俺を精神科医に連れていくんだろう。

そんな馬鹿げた質問に青髪は静かに頷いた。

「・・・・・フフフ」

「信じられない・・・よね？」

「信じるよ。だけどただこんな貴重な体験をしてる奴がいるなんて笑えるぐらい俺は運が良いつて思つてな～」

「本当・・・?」

「嘘つこないでうすんだよ」

若干涙目で上田遣いしていく青髪に思わず心がグラッとした  
のはお兄さんとの秘密だ。

俺はノーマル俺はノーマル俺はノーマル俺はノーマル

「ありがとうっ!ー!ー!

ガシツ

「え・・・?」

何故に抱き着くのだろうか。いや、抱き着かない。

反語になつてない

そうだ!俺はノーマルなんだ!!決してBのつくれるやじない  
んだ!!

それに俺はその・・・翔子が好きな訳だし・・・なんて言つか・・・  
その・・・

つまりだなっ!!

「お、俺はBじゃないんだあああー!ー!ー!

「ふわっ!ー?」

ビクッとして俺を見上げる青髪。身長に差がかなりあるため必然的に上田遣いとゆうなんとも強力な攻撃をしかけてきた。

改心の一擊

達也に519のダメージ

「グッ・・・・・・」

「え、えつと大丈夫？」

なぜこいつは、今まで仕種や声質やら女っぽいんだー？

「葉王？ いつたい残つて何をしてあるんじや・・・？」

「あ、秀吉（優子）！？」

あれ？

一人ともお互い言つた事に顔を見合わせる。

といへるに藍髪（シタ葉生）ともじの体勢を見られたのはかなりま  
ずいんじやないか？！

「な、ななな？！お、お邪魔したのじや…！」

「はー、待つてよ秀吉！／＼／＼

秀吉の反応でやつと俺達の体勢に気づいた葉生は慌てて抱き着いていた手を離し廊下を走る秀吉を追ってロクラスの教室をでていった。

「さて、一人取り残された訳だが……どうするか」

1、帰る（そして噂が……）

2、追い掛け（そのあと合流して……）

選択肢二つかよ！？

ま、まあまともな選択肢なだけマシか。伏字が気になるけど。

2、だな。

流石に学園に知れ渡るのは勘弁だわ。

「離すのじゃー。わしは気にしないと云つておぬじやうひー。」

「いや、だから気にするしないの問題じゃないんだよー。誤解なんだ  
つてばー。」

「一人とも冷静になれってのー。」

「なるほど。要は葉王の感情表現が下手だったといつ詰じやな」

「ああ（うん）」

あのあと、なんとか秀吉への説得に成功して事無しを得た。  
一人とも熱くなつてたから大変すぎたよ、ホント。「それじゃ秀吉、  
僕も荷物持つてくれるから正門のところで待つてくれる？」

「うむ。分かつたぞい」

秀吉はスッキリした表情で額を反転して外へでていった。

しかし青髪といい秀吉といいなんでこんな男の娘が多いんだ?  
名田上だけ男つて事もあるかもしれないけど

「えつと・・・」「めんね」

「何がだ?」

「その・・・抱き着いちゃって・・・」

「ああ、それが。良いよ別に。仕方なかつたんだろう?」

「う、うん」

「なら謝らなくて良い。気にしてない」

むしろ嬉しく・・・ゲフンゲフン

「そつかあ・・・」

「それじゃ、また後でな」

「うん。」

そういえば雄一達は先に帰ったのか？

そんな事を考えながらAクラスの扉を開ける

「・・・遅い」

「翔子？待つててくれたのか？ありがとな

「・・・違ひ」

『「あんな、抱き着こちやつて』

『いや大丈夫だよ』

「・・・許さない」

「ま、待て！なんでお前が盗聴器なんてものを使えるんだー・？やめろつー頭が！頭が割れるうううつー！

雄一、覚えてるよおおおおおおーー！」

犯人が雄二と断定した理由は幼なじみの勘だが、その勘は限りなく正解に近かつた。

「フツ。ムツツリーに頼んだ甲斐があつたな」

## 異常者、転生者に会つ（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

連投してみましたがどうでしたでしょうか？

感想くれると泣いて喜びます。

葉王の紹介及び主人公の紹介は明日あたりに投稿します。

長文失礼しました

## 主人公設定

### 主人公設定

名前 五十嵐 達也

年齢 16歳

性別 男

身長 174cm

体重 61kg

趣味 ゲーム

特技 ゲーム（明久レベルのゲーマー）

性格 いたつて普通の真面目少年（だと自分では思っている）  
客観的には、傷つきやすいガラスのハートを持つアホ（バカ）（天才）

好きな物 ゲーム

思いが真っ直ぐな人

やる時はやる人

嫌いな物 人の努力や信念を笑う人間

容姿 爆発した方が良い位に顔立ちは整っていて、日本人らしい  
黒髪と黒い瞳。

本編の主人公。坂本雄二及び霧島翔子の小学生の頃からの幼なじみ。  
翔子とほぼ同じ時期に水奈月小学校に転校してきた。  
当時については後々語るとして・・・

愛想が良く誰にでも笑顔を向けるが、本当に嫌いな奴にはかなり冷酷な態度をとる。

あくまでも彼の気の許せる人は坂本雄一、霧島翔子、及び西村先生であり、本心をその他的人物にぶちまける事は滅多に無い。・・・多分。

その代わり、気の許せる人物から言われた事は余程見え透いた嘘で無ければ大抵は信じるという少し抜けている部分もある。

趣味のゲームに関しては依存度がかなり高く、夜中まで起きてオンラインゲームに出没する事もしばしばあり、一学年時にはそれで遅刻することも多々（・・）あつた。

また、やるゲームの種類だがゲームならなんでも問わない。といった万能ぶり。ギャルゲーにも手を付けているという噂も・・・

両親は彼が7歳の時に事故で他界しており、現在は親戚の人物と二人暮らしだが、その人は仕事で家にいない時間が多く、事実上一人暮らしに近い状態。

兄弟もおらず、肉親は誰もいない。が、その話題について彼は触れられると機嫌が悪くなる。

まだ吹っ切れていないからか、また違う理由なのかは不明。

学力 現在、学年首席レベルだが一学年時は良くてAクラスの下位レベル。

学年首席は彼の振り分け試験時の苦渉の努力の結果。

策略 坂本雄一には及ばないものの戦略ゲームで鍛え上げた悪知恵はかなりのもの。

**身体能力**　身体能力はかなり高く、学校の3階から落ちても傷一つつかない。

が、物を扱うスポーツに関してはてんで才能がない。

**行動力**　出来る事は出来るだけやる。成功の可能性が低い場合は博打を打つてみたりと、代表の癖に行動的

召喚獣の装備は洋風の剣、洋風の鎧を身につけている。

学園長に振り分け試験の努力の結果で気に入られたため、特別な仕様として白い翼が付いている。（本人曰く、厨二臭いからこんなもんいらねえ！！）

腕輪の能力は、使用時改めて更新します。

**成績**　振り分け試験の結果はどれを見ても学年トップレベル。特に暗記科目である世界史や、日本史、さらには実科教科は群を抜いている。

名前	朝倉 葉王
年齢	16歳

性別	男の娘（男）
趣味	人間観察
特技	家事全般

好きな物　自分を信じてくれる人  
嫌いな物　いつも他人を見下す人

性格　基本穏やかで感情表現が苦手。

容姿　一言で言つと男の娘。青色の髪は明久より少し長めで秀吉よりは少し短い

本編の題名の転生者にあたる人物。

原作の知識（1～3巻まで）を持つており、原作との異なる点に疑問を持つている。

その疑問が解決したり着く先はいつも達也なため、達也が転生者では無いと信じる反面、彼が本当は転生者なのでは？と精神上の矛盾に心が揺れている事がしばしばある。

木下姉妹とは幼なじみで、家は道路を挟んで向かい合わせ。

両親と共に住んでおり、自分が転生者であるとばれる事なく良好な関係を気づいている。

両親は航空会社に勤めており、海外旅行に行く事もしばしばある。

学力　前世の知識を合わせてAクラスレベル

策略　坂本雄一を信頼している為、頼る場合が多い

身体能力　転生の特典? なのがどうかは不明だが、本人曰く、前世の数倍の才能がある

行動力　面白そうな事には進んで参加する。  
たまにそれで痛い目に・・・

Fクラスでは秀吉と同じ立場のような存在。

須川曰く「彼女の性別は『葉王』」  
案外、葉王はそれについては否定はしないケースが多い。  
また、優子がらみでも良く一人とも『制裁』を加えられる事多く、  
苦労が絶えないらしい。

召喚獣の装備は爆弾、それに防弾チョッキ。

この装備は彼が前世でサバイバル同好会に入っていた事からその辺  
がリンクしたらしい。

是非、サバイバルで爆弾なのかという疑問に答えて欲しい。

成績　　言語関連の学問が得意で現代文、古典では学年トップレベル。

英語は学年一位の実力を持つ。

振り分け試験では、より原作に近いところで転生ライフを送りたい。  
と無記名で教師に提出した。

人には厄日と吉日が必ずある（前書き）

アア、ソラガアオイ。

オレノダイジナダイジナヒホウガ

ショウゴニ・・・×

タマタマコロレテシマツタヒニモ、タイヨウハサンサントオレタチ

ヲテラス。

アア、キョウハイイテンキダ。

イガラシ タツヤ

高橋 洋子のコメント

何故でしょつか。こんな文章でも五十嵐君の霧島さんへの優しさを感じました。

先生、五十嵐君が戻つてきません。

木下 優子

高橋 洋子のコメント

早く戻ってきて欲しいものです。

人には厄日と「ひ日」がある

ジリリリリー！

ゲーム機やジャープ、マガン、サン一などと「ハイjack等が転がつた朝の一室で田代まし時計が大音を鳴らす。

「・・・「へん」

達也は整ったベッドからムクリと起き上がり・・・

「眠い・・・」

アラームを止めてまた毛布に潜つた。

実はこの男、昨晩、いやほぼ毎日4時までオンラインゲームをやつていたりする

それで学年首席など、是非その頭脳を分けてもらいたいものである。

「・・・達也起きて」

「・・・あと10分」

「・・・遅刻しちゃう」

「・・・うん」

そんな達也をゆさゆると揺さぶる手があった。  
皆さん」存知の通り、霧島翔子である。美人に起こして貰えるのは

実際に羨ましい事だが……

「スースー……………ぎやあああああー…？」

スタンガンで起されたるのは勘弁して欲しい。

「……私が作りたかった」

「あー、後で少し教えるからそしたら作ってくれ……な?」

時間は過ぎ、五十嵐家リビングにて復活した達也がフライパン片手に卵の殻を割り、中身を落とす。

ちなみに、翔子は料理は出来ない。いや、出来るのだが、それは原作でも理解できるだろ?。

「……分かつた。初めての共同作業。……嬉しい

「いや、別に共同作業は初めてじゃないからー?」

「……お互い死ぬまでずっと共同作業」

「だから翔子には雄二が……はあ……」

う、嬉しいけど……なあ？

翔子は雄二が好きなはずなのに甘えてくるため、複雑な感情を持つ達也だった。

「・・・少し待つて

「?分かった

さらに時は過ぎ、通学の用意をして一人は玄関に来ていた。といつても翔子の用意は玄関脇に置いてあるのだが・・・

「・・・（ントントン）（ン）

「つて、無言で階段上がつてくなよー？」

慌てて叫んだ達也に振り返つて翔子は首を軽く横に傾けた。  
しかし、達也も黙つてはいられなかつた。

2階にあるのは自分の部屋と、使われていない一部屋

使われていない部屋に翔子が行く理由があるはずもなく、間違いなく翔子が行くのは達也の部屋だけになる。

その自分の部屋には、イロイロと他人に見られたくないものがある  
わけで……

「早く学校に行こう？な？」

「……駄目。出しあないと」

ああ、出しあつか。

翔子は家庭的だよな。

確かにいたゴミは出した覚えも無いし多分大丈夫……

「大丈夫じゃねえ！？」

「……いつの見ちゃ駄目。見るなら私だけを見て欲しい／＼」

「いや待て！その本の理由は分かる気もするけど、それと俺の神ゲー達がそこにいるのは関係ないからな！？」

ビシッと翔子が左手で持つ真っ二つに割れたティスクが入った燃えないゴミの袋を指差す。

そんな達也に翔子はそのティスクに視線を移した。

「……達也が遅刻したのはこれが理由。夫に遅刻させないのが妻

の役目「

「いや、夫婦じゃないから・・・ってそれはー?」

全く持つてその通りなので、本論については突つ込めない達也は袋の中に入つたあるものに気づくのだった。

「えっと・・・達也君凄く悲しそうな顔してるけど何かあったの?」

「翔子、何が知ってる?」

「・・・いや、知らない」

ゲームディスクと一緒に心まで折られたかのようにシステムディスクにつづくまる達也。彼の中では

H口本ぐゲーム

という方程式でも成り立っているのだろうか?

指摘すべきはそこじゃない

「や、そつなんだ・・・」

一緒に登校してきたところから推測するに、翔子が関係しているの

だと理解して達也に哀れみの笑いを送る我等がAクラスの常識人？愛子とだった。

「一応、秀吉から（無理矢理）聞いた事も言わなきゃなんだけど……」

「……秀吉？」

「うん。私の弟なんだけど……」

とりあえず達也についてはスルーを決め込んだ三人は自分の身内等の話を花開かせるのだった。

『五十嵐君、何かあつたのかな？』

『これは声をかけるチャンスよ！』

『悲しむ五十嵐君に優しく声をかける私……その後……キャッ／＼／＼』

駄目だこの女子連中。

速く何とかしないと……

「吉井君、君は僕を（ゝゝ）

失礼。クラス規模だつたよ。頭がヤヴァアイのは……

オレノゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム・  
・・ゲーム・・・ゲーム・・・ゲーム。マダ、コウリヤクシテナカ  
ツタノニ・・・

こいつも何とかしないとまずいかも知れない。

葉生Side

場所は代わつてFクラス

ガタガタガタガタ

「」

ガタガタガタガタ

「吉井君、どうしたのですか？何かあつたのでしたら私が教えてあげますよ？・・・一人で

「な、ななんなんでもありません！！」

「そうですか。残念です」明久、ご愁傷様・・・www

僕たちFクラスは昨日の試合戦争の補給テストを受けている。

### 1時間目は数学

このテストの担当の先生があの船越先生だつたんだよ。

原作でも知つてたけど、明久不憫過ぎるでしょ・・・www

はあ・・・クラス皆が笑いを堪えてる状態だし、数学は捨てた方がいいかな～www

雄二なんか笑いを堪えて目から涙流してるし・・・

それより、姫路さんの弁当を食べない方法を考えないと・・・

葉生は笑いをかみつぶしながら、思考を切り替えて物思いにふけつていった

時は進んで昼休み。

雄二は姫路が弁当を作ってくれたおかげで浮いた食費で全員分の飲み物を買っていた。

もちろん、後で請求する。・・・明久には。

「コンニチハ、ユウジ」

ガタンガタンと自動販売機からジュースが落ちるのを確認し、ふと雄一は達也の方に振り返った。

「おう。悪いが今から作戦会議だから後にしてくれ?って、どうしたんだ、達也!？」

別に雄一でなくともすぐに分かる達也の雰囲気の異常だ。視点は定まっておらず、足元もふらついている。

昨日久しぶりに会った幼なじみの異常に流石の雄一もかなりの動揺を見せた。

「ドウシタモコウシタモナイ。ジツワオレガクリアシテナイゲームガ・・・（『』）

雄一が達也の異常の原因について聞くと雄一にとつて実にどうでもいい理由をカタコトで長々と話し出す達也。

「ダカラ、ソノゲームノカントクニアヤマラナイトイケナイダロ?」

「は?何言ってんだ、お前。別にゲームの監督なんかに謝りにいかなくて・・・も・・・」

達也は5分くらい話しつづけた後、ようやく雄一に話す機会を回してきた。

半分くらい、そのゲームの長所を語られた訳だが。待てよ?確かに話題をどこかで・・・

遙か昔。坂本雄一がまだ若かつたころ「まだ16歳だ」「うーん」。

夕方の馴染みの深いあの公園に一人の少年の影があった。  
もう一人の幼なじみの少女、霧島翔子の姿は無い

彼女の家はかなりのお金持ちで、それなりの教養を、という執事あつてのお願いで、なんでも彼女はピアノのレッスンに通っているらしい。

らしい、といつのは11歳の時の達也はまだ一人に関わったばかりで、二人については言伝に聞いた程度だった。

「雄一は最近ずっとそれやつてるよね？やつて飽きないの？」

「まあな。お前は好きじゃないのか？」

「うふ。俺はやってみるは良いんだけど、続かなくつて……」

「そうなのか。……そう言えばこんな話を聞いた事があるぜ」

雄一の問いに答えてポリポリと苦笑いする達也。

「ゲームをクリアしないで捨てちまつと、なんでもそのゲームを作った会社に頭を下げるに行かなきゃいけないんだ」

「えー？ ホントー！？」

「ああ。だから既飽きたとか言つてゐる奴は裏でいつひつやつてゐるんだぜ」

「へ、そつだつたんだ。えつと僕がクリアしてないゲームは・・・」

子供らしい細く小さい華奢な指を親指から順に折つて数を数えていく。

「うへ。9個もあるよ・・・」

「やつなると9個の会社に謝りに行かなきゃ行けないな！」

「そんな・・・まだ捨ててないから聞かぬつよー！」

「ちがうんだ。頑張れよ」

「うそー。」

ああ・・・そんな事もあつたなあ。

はっきり言つと、雄一にとつてどうでもこゝよつた事だつた。 . . . のだが、達也にとって今現在も重要な事らしい。

「こいつもビーム抜けてたんだつたよな . . .

待てよ？ つて事は、こいつがゲームに走つたのは俺のせいつて事か！？

こちらを訝しげに見ている達也を置いておき、窓からスッと窓をつち眺めてみる

確か翔子が達也がゲームばかりで自分を構つてくれないとが言つてたような . . .

ブルツ

なんか翔子に謝らなきゃいけない理由が出来た気がする。

「なあ、達也」

「ナンダ？」

「実は別にゲームをクリアしてなくとも、捨てて良いんだぞ？」

「だから、ゲーム会社に行かなくても良いんだ

「 . . . . . 」

「・・・・・

長い沈黙の後、達也の眼にだんだんと意識の色が見えてきた。

「なんだあ～。やつだつたのか。つまりは雄一は俺に嘘をついた訳だな？」

「あ、ああ。まさか本氣で信じてるのは思ってなかつたあああー？」

「キツ

達也の攻撃

雄一の頭にアイアンクローラー

雄一は力尽きた

「こつもなじ思いこつ切り田潰しもするんだけど――」

「もう十分被害を受けたんだが」

「ロッ

ビクッ！？

「どうした？」

「ナンデモアコマセン

「それなら良い。続けるぞ？」

出来ればそのゲームを雄一が貸してくれると嬉しいんだよな

「・・・名前は？」

「黒騎士物語」

「・・・」

「・・・・・・・・どうした？まさか・・・」

じとつとした黒眼で雄一に視線をむける。

「・・・・・必ず貸そつ」

何か決心したように雄一が頷いた。

「へえ～。雄一はP.S.3は持つてなかつたはずなんだけど？」

実は達也は雄一の苦心した顔を楽しみながら眺めていたりする。

『貴様、謀つたな！？』

『のせられたのが悪いんだりつ？』

視線だけで会話する二人

「貸してくれなかつたらどうしようかな？」

・・・そうだ！翔子に教えてあげよう 坂本君の密かなる想いを

「なつ！？」

「フフッ まあ、俺は他にも雄一の弱みを握ってる訳だし、どうせだしついでに腐ったアメリカザリガニでも雄一の家に送つてみようかな？」

「わ、分かった！分かったからやめてくれ！」

明らかに動搖を見せる雄一に、達也は満足げに口元を綻ばせる。  
『残念だったね。昨日翔子にあんなものを渡した罰さ。精々期待しているよ』

『達也、貴様それも覚えて・・・チツ、月の無い夜道は気をつけるんだな』

「フフッ それじゃあ頼んだよ。坂本君」

満足そうに鼻歌を歌いながら達也は元来た道を帰つていった。

「坂本？遅いから貰食べちゃつてるわよ？急がなきゃ

「・・・おう。今行く

違う自動販売機で同じく飲み物を買つていた島田と会流し、雄一は明久達の待つ屋上に向かうのだった。

「雄一、島田さんも遅かったね」

「坂本が遅かったのよ」

何してたのかしらね~、とからかうような眼で島田が見てくる。

「そうだ明久」

「何? 僕は女の子のメアドなんて知らないよ?」

「お前に聞く事じゃないだろ? が・・・」

「あ、そうだね! って凄くとぼされた気がする! ぼくだってねえ!」

「あー、分かった分かった。それで明久。黒騎士物語つてゲーム持つてるか?」

「持つてるけど・・・どうしたの?」

「頼む明久! 一生の頼みだ! …そのゲームを貸してくれ!」

「へー? 良いけど・・・」

珍しく自分に頭を下げる雄一を見て明久不思議そうに首を傾けながらやう言つと、雄一は胸をホツと撫で下ろした。

『その代わりこれ食べてくれる?』

『？まあ、そのぐらいなら・・・』

「姫路弁当いただくぞ？」

「あ、はい。お口に合うか分かりませんけど・・・」

突然の視線での明久の言葉に疑問を感じながらも雄一は重箱に詰まつた姫路の料理、そのうちの卵焼きを口にほり込む。

「ああ。うん・・・味は普通グバツ！？」

バタン  
ガシャガシャン  
ガタガタガタ

苗字がサから始まる人

四十四位 全体運が最悪

特に名前がユから始まる人は外出は避けるようにしましょ

## 人には厄日とこの日が必ずある（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

なんだか達也の壊れ具合がひど過ぎた気もしますが、今回の件で少しあはゲームへの依存度は減ると思います。・・・多分

壊れた場合を書くときにカタカナで片仮名で書くことしか思い浮かばず、こうなつてしましました。

壊れ具合を何か良い方法で書く方法があれば教えていただけないと嬉しいです。

長文ありがとうございました！！

## 策謀！対Fクラス？（前書き）

えつとあらかじめ書いてたのを修正していくだけでかなり時間がかかる（泣）

出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります・・・

それではね（<O>）／

## 策謀！対Fクラス？

翌日・・・

「早く行くぞ？翔子」

「・・・うん」

普段通り、といった様子で一人で達也の家を出る。

「行つてきます」

「・・・行つてらつしゃい」

「・・・なんでだよ？」

「・・・夫婦みたい」

「いやだからなんでだよ・・・」

出発早々、翔子の夫婦漫才のネタ振りに頭を悩ませる達也だった。

「…………」

「…………」

が、一人の会話はあれつきりで通学路の半分が過ぎるまで一人には会話といった会話は無かった。

そんなこと知らないとばかりに、上空は雲一つ無い青空がひろがっていた。

「……達也」

「ん、なんだ？」

「……昨日はじめんなさい」

やつと見つけた会話のきっかけに、話題の切り出しを考えていた達也も、突然の謝罪に眼を白黒させる。

「へ? 昨日……?」

「……うん。私のせいだ達也が悲しんだ」

「あ、あれか~

実は――」

達也は雄一が数年前に言つた事を遠回しに、出来るだけ雄一が関係ないようすに笑い話のように翔子に話す

それを聞いた翔子の反応は

「・・・そう」

ある方角を見据え冷徹にそう言い放つた。

この時、あるFクラスの代表がベッドから冷や汗をかきながら飛び起きたらしい

「おめでとうございます雄二に・・・（死亡）フラグが建ちました！！

なんだ？この電波は！？

とうとう俺の脳もおかしくなって来たかな？

・・・まあ、雄二に翔子のフラグが建つたとか今更過ぎる気がするし。いつかあ

「そういえば翔子」

「・・・なに？」

「昨日言ひそびれたんだけど・・・なんで朝からお前がいたんだ？鍵はかけたはずなんだが？」

「合い鍵なら持つてゐる」

作った覚えなど一切無いのは俺が記憶喪失って事なのかー？

「・・・なんですかー？それに理由になつてねえー？」

澄み渡る文月の青い空に少年の叫びが響くのだった

「おはよう、翔子ちゃんに達也君」

「おはよう、翔子に達也」

「・・・おはよー」

「おはよう、一人とも」

教室に入ると愛子と優子が挨拶してくれた。

いま、思つたんだけど△クラスで親しい女の子は皆、子つて名前  
なんだよな

俺には名前が 子さんとの友好度を高める何かがあるのか?

やめよ!!。俺にそんな特殊能力的な類のモノはない。

「今日は普通だね」

「昨日がおかしかつただけよ」

「ハハハ、あれはまあ・・・イロイロあつたんだよ」

「ふうん。まあ詳しい事は聞かないわ」

「ボク的には聞いてみたい話だけね」

そう言つてくれる一人に、心の中だけでも感謝しておひつと思つ。  
自分で作つた弁当と教材の入つたバックを個別に用意されたシステムデスクに置く。

「そういえば優子。前に言つておいた話だけど・・・」

「ええ。ちゃんと聞いて（拷問して）きたわ」

「・・・いま変な言葉が聞こえたのはボクだけなのかな?」

「いや、俺も聞こえた気がする」

「・・・（ノクン）」

ああ、優子の弟よ。

一昨日聞き分けが良かつたのはいつも優子から教育（といづらの拷問）を受けているからなのかい？

・・・『愁傷様とだけ言つておく

ハハハ、弟さんも大変だね』

妙な伏字に苦笑いを浮かべながら、三人は弟の秀吉に合掌した。

「どうしたの？三人揃つて手なんか合わせて・・・」

「・・・なんでもない」

「ああ、気にするな」

「気にしない方がいいよ」

「？？？」

「僕も呼び出していつたいなんなんだい？五十嵐君」

「ああ。それじゃあみんなFクラスがDクラスに試召戦争で勝つたのは知っているよな？」

久保も含めた五人でクラスの談話するように用意されたスペースでそれぞれが好みの飲み物を飲んでいた。

切り出したそんな俺の質問に翔子以外は、なぜそんな話をするのか分からぬといつた表情をしてから頷いた

「えっと、達也君はFクラスが気になるの？」

「気になる・・・まあ言によつてほんづなむか。

先に言つておく。

Fクラスは間違いなく俺達Aクラスに試召戦争を仕掛けてくる

「「「」」」

「ここまで言つた直後、一瞬にして一昨日Fクラスの面子の前で言つた言葉を思い出した。

『安心しろ。俺はクラスのやつらに教えるつもりは無い』

・・・あれ? どうしよう。ま、まあ多分つて付けた気もするし、いつかあ。

・・・つてのはまずいから後で雄一あたりに謝つと」。

「もちろん、これは仮定なんかじゃない。確定した未来だ。別に未来が見えるとか厨二くさい事は言つ『氣は一切無いが、これは間違いなく真実だ』

言葉を続ける俺に、翔子以外はポカンと口を開けている。

タバスコ突っ込んでみたいかも・・・

いけないいけない。

王水(姫路の弁当)ぶち込むよつマシだが流石に笑い事じや済ま・・

・済むかもな。

あれ、おかしいな?

なんで姫路さんの弁当つて伏字で入るんだ？

まあいいけど・・・

「つて事は私に秀吉からFクラスの戦力を聞けつて言つたのは・・・

」

「ああ。あらかじめ聞いておいた方が作戦が立てやすいだろ？」

済ました顔でそうは言つてみるもの・・・

どうしよう！？

完全に対Fクラスを考える感じになつてるぞ！？

まあ、元々その気だつた訳だが、Fクラスとの約束が・・・

・・・雄一の嫌がらせは覚悟しておくべきか？

内側はかなり複雑な感情がうごめいていた。

「それならボク達だけじゃなくてクラスの皆の前で言つた方が良いんじやないのかな？」

「そうね。確かにFクラスを卑下している所はあるけど、達也がそこまで言つなら皆、油断なんかしないはずよ？」

愛子が提案した案に三人は頷く。

その後から優子が代表して理由も付け加えた。

「確かに優子の言つ通りがもしれない。だが、恐らくFクラスはクラス単位では攻めて来ない」

「確かに優子の言つ通りがもしれない。だが、恐らくFクラスはク

「 「 「？」？」」

「それはどういう事だい？確かに戦力差は大きいけど……」

「代表対決って事？」

「当たりだ。

だが、あくまでもそれはAクラスへの最初の提案だろう。もしAの代表が俺だと分かればあいつらの提案は変わる

「ちょっと格好付けて指パッチンをしてみる。

「 「 「・・・・・」」

え？指パッチンした俺がバカだったから誰か何か言ってくれえええ  
！（泣）

「・・・・達也。それはしなくてよかつた」

「う、うん。ごめん」

「ありがとうございます、翔子様！  
気まず過ぎて死ぬところだつたよ！  
！」

・・・話は戻り

「流石に吉井君も君が代表だという事に気づいているんじゃないかな

い？」

数秒間考えるそぶりを見せていた久保がそんなことを尋ねてきた。

「…吉井限定なのか？」

そんな疑問も浮かんだが、スルーを決め込むことにする。

「それは無い。一年の間の俺と翔子の点差はわかつてゐるだろ？」「

「確かに…」

「それもそうね…」

「え？ 達也君つて前から学年首席じゃなかつたの？」

思い出したように頷く久保と優子。

反対に一年の終わりに転校してきた愛子は一人の納得する姿に首を傾げた。

「ああ。実は俺の元の成績じゃあAクラスに入る事すら厳しかったかもしれない」

なんで久保君と優子が元の俺の成績を知つてゐるのかは分からぬが、総合成績はこの振り分け試験でだいたい3000点位は上がつたと思う。

ゲームが三ヶ月禁止された事が代償だったんだから、当然といえば当然だな。

・・・ああ、あの二ヶ月は死ぬかと思つたぞ。

「アハハ・・・ゲームしないだけでそんなに上がるなんて・・・」

一年間禁止したらどれくらい上がるのかな？

愛子はそんな疑問を持つが、言わない事にした。  
言つてしまつたら最後。

幼なじみの少女が本当に実行する様な気がしたからだ。  
あの様子じゃあ、一年間ゲームをやらなかつたら死んでしまう勢い  
だつた。

「とつあえず話は戻すぞ。確かになんでこの五人を集めたか?だつた  
よな。

それは――」

「　「　「それは・・・?」「　「

翔子以外の三人が揃つて俺の言葉を重複する。

「・・・何となくだな」

ドタドタドタッ

アハハ、ちょっとした趣返しだバカヤロー

しつかし、見事なこけつぶり役者びっくりな演技だね。ウンウン

「ア、アンタね~」

最初に復活した優子が、憎たらしこよつた目で見てくる。

「まあ良く考える。第一Fクラスの戦力も分からぬのに俺達の戦力を限定出来る訳がないだろ？」

「…………」

優子の後から復活した二人も含めて三人で顔を見合わせる。

「このゲーム……俺の勝ちだ！！」

「…………」

あれ？ 翔子さん？

何故にそれを言つんでしょうか！？

言つことだつたら俺が勝利を確信する前に言えよーーー。

「…………それは理不<sub>可</sub>」

うつ…………何も言えない

ガシッ

翔子の全く持つてその通りの言葉に意氣消沈する達也。

その達也の肩を何者か（つてか優子）が掴む。

「少しお話をよしよつか」

「ちゅうぶボクもお話したかったんだ～」

「僕もそれに便乗させてもらひねつ」

「えつ？あれ？優子以外キャラが変わってるぅあああーー。」

一言おつか。

皆、良い笑顔だった 一言じゃない

「 もつ・・・・達せのせいで何度も本題から外れてるのよ？」

「なつー…しきのは間違になくお前達のせ・・・」「」「ギロツ」「  
「めんなさこ」「めんなさこ」「めんなさこ」「めんなさ  
い」「めんなさこ」

優子はともかく優子はノリで怒ってるふりをしてるだけだろ、絶対  
！？

久保君は・・・まあ良いんじゃないかな？

考える事を放棄した。

「それで？なんで知つてゐるかは後で聞いてあげるから、なんで私達五人だけ集めたのか教えてくれるかしら？」

「は、はい！分かりましたであります！！

えつとまずは姫路瑞希。皆知つての通り、久保君クラスの学力ちからを持っています。なので久保君に相手をお願いしたい。」

「分かつた。任せよっ」

「二人目はえつと・・・土屋、土屋ムツツリーー。確かにこんな名前だつた気がします。ムツツリーーは保険体育じやあ学年トツプレベルの実力を持つてるので、確か保険体育が得意の愛子さんに相手を任せたいです。」

「OK！ムツツリーー君か～。面白そつだな～」

（注）決して名前ではありません

「三人目は優子さんの弟の木下秀吉。

学力はそんなではないけどメンバー的に言えば妥当に彼が来るはずです。

もちろん彼は、彼の事を知つてゐる優子さんにお願いします

「秀吉ね。分かつたわ」

「四人目は坂本雄一。多分あいつの事だから何かしてくるだろうか  
ら

「・・・うん。私が殺る」

視線を優子から翔子に向けた瞬間、翔子は自分から立候補した。

字が不穏当だったのは何かの間違いだろ？。・・・多分

「五人目は、苗字は分からないけど名前は葉王。」「朝倉よ？」ああ、朝倉葉王。学力は未知数だから俺がやる。って言おうと思つたんだけど優子さんが何か知つてゐみたいだな」

「知つてるもなにも私と秀吉は葉王の幼なじみなんだから。それに、なんで葉王の事知らないで他の人の事は分かるのよ」

優子は呆れたような目を達也に向け、一つため息をついた。

・・・そこまで有名なのかよ、名前すら聞いた事無かつたぞ？まあ、苗字なら朝倉なんて・・・たくさん・・・

あ～、妙にいらっしゃってきた。忘れよう。

「・・・達也？」

「ん？なんでもないよ」表情に出ていたのか翔子がこちらを心配そうに眺めていた。

すぐに考えは振り払ったのに氣づくとは幼なじみの勘つてやつか？

「？まあ葉王の学力についてだけど、あの子は全教科Aクラス上位レベル。Fクラスに今いる理由は全教科のテストを無記名での提出

「全教科？それはいくらなんでも無いんじゃないのかい？」

俺の感じた疑問を久保君が聞いてくれた。翔子と愛子も同じ疑問に思っていたようだし、ありがたい。

「ええ。あの子は元からFクラス連中（明久や雄二）と親しかったからほぼ間違いない自分から行つたのよ。」

・・・Aクラスの設備を捨ててまで行きたいクラスか。

ふと、一昨日会つたFクラスのメンバーを思い出してみる。

確かにそれぐらいの価値はあるかもしれないな・・・

「話は戻すけどあの子の文系教科はトップレベル。

最近は成績を見せて貰つた事は無いけど、多分落ちてはいなはずよ」

「・・・なるほど。それじゃあ俺達は高得点を取れる奴が文系科目で真っ向勝負するか、わざと他の教科で相対して俺か翔子、久保の三人のうちの誰かが得点で差をつけるか、の一択になる訳だな」

いつの間にか敬語を取り外した達也は、自分達の葉王に対する戦術を述べた。

勝つだけなら間違いない後者を取る。

だが、Aクラスとしてのプライドを少なからず持つてゐる俺達にとって相手の弱点をつく。といった事は出来るだけ避けたいのだ。だから前者を取らない。といった確率は0ではない。それに、相手に教科の選択権があつた場合は必然的に前者でしか勝てなくなる。

となるとあこつたの相手は俺つて事になるか・・・

「あいつの相手は最初と変わらぬ俺。それで良いか?」

四人の思考でもそれが一番勝つ可能性が高いと終着したらしく全員が首を縊にふってくれた。

そこでじょうづし予鈴がなり、高橋文史が教室に入ってきた。

「優子の話は後でまた」

「分かったわ。一応言つてもおくれ」ともあるしな

俺の話と弟の話で違つた点でもあつたのか?

達也は優子の発言に疑問を持ちながらも、自分の席(優子の隣)に戻つていった。

## 策謀！対Fクラス？（後書き）

長文お読みいただきありがとうございました！

なんだか試合戦争終了までかなり話数が多くなりそうですが・・・

（ ） m

Aクラスなんですけどね～

それではまた（^○^）～

人間には家でしか見せない一面もある・・・多分（前書き）

いつも、たぬくです（^〇^）

今日は達也の同居人が登場します。

まあ、もうすでに出てるんですけどね。ネタバレネタバレ

それではどうぞ（^〇^）／

人間には家でしか見せない一面もある・・・多分

『FクラスがBクラスに攻め込んだ』

その噂は瞬く間にAクラスである俺の耳に届いた。

・・・と言つてもBクラスは田の前だし、防音設備も調つてゐるAクラスでも生徒の声なんかが微かに聞こえるんだよな。

「んで優子。戦力の確認のために弟から聞いた話をお願いできるか？」

「ええ、まず――」

5時間目、高橋女史の授業だったのだが、試合戦争で借り出されたこともあり、Aクラスは自習になつていた。

5分休みは短すぎて、昼休みは愛子が部活動の集会があり、五人が全員が集まれなかつたので、関係の無い生徒と席を入れ替えてもらひ優子がこの自習の時間に話してくれる。という事になつたのだ。

やはり優子があげたFクラスの戦力は

総合成績が学年トップレベルの力を持つ姫路瑞希

総合成績はAクラスで、文系教科に関しては学年トップレベルの朝倉葉王

勉強に関してはイマイチだが、計略に関しては神童を思わせる『元

神童』坂本雄一

総合成績ではFクラスレベルだが、保険体育に関しては学年トップレベルの土屋康太。通称『ムツツリー』

成績に関してはどれもFクラスだが、演技に関しては文句の付け所が無い？演劇部ホープ『魔女（笑）の弟』（ボキッ）アアアアアア！？

木下・・・秀吉

そして六人目

文月学園史上初の称号を与えられたバカ『観察処分者』吉井明久

観察処分者の肩書きの分、召喚獣を呼び出す回数も多いし、確かに魔女のお・・・木下弟よりは一騎打ちだつたら戦力は上かもしけない。

「つて優子！なんで関節技をかけたんだよ！？」

「不穏な気配がしたからよ」

「クッ・・・理不尽だ」

「うでもない。とだけは言つておこう。

「ま、まあ優子のおかげでだいたいの戦力の見当もついただろ」

そういうえば木下弟はなんで大事な情報を敵である優子に言つたんだ

ろ・・・う?

ふとそんな事を考えた時、優子の顔が視界に入った。

・・・ああ。無理矢理だつたんだつけ。  
なんか木下弟には悪い事をしたよ。うん  
後で何か奢つてあげよ

「まあ、こんな訳だけど質問あつたりするか?」

「はいはい。いま、FクラスはBクラスと試合戦争してゐるけどFクラスが負けちゃつたらどうするの?」

「確かに、それで士気の上がつたBクラスが攻めて来たらどうするんだい?」

初めに愛子、次いで久保君が付け足す感じで質問を重ねる。

「あー、まずは愛子の質問に答えるぞ。その場合になつてもFクラスの代表の事だ。敗戦クラスがまた試合戦争を挑める二ヶ月後に何度でも仕掛けて来るだろう。その時の予習になつたと思えばいい。久保君の質問だが、Bクラス代表の根本は俺に頭<sup>クズ</sup>が上がらない。そんな代表の事だ、仕掛けてくる勇氣も無いだろ」

「あ、そ、そなんだ。分かつたよ・・・」

後半忌ま忌ましいように顔を歪ませる達也に少し困惑しながらも愛子と久保は了解の意で頷いた。

「他に質問はあるか?無いなら各自自室に戻つてくれ

翔子と優子も特に気になる点は無く、誰の手も上がらずに解散となつた。

ちなみに席順は

優子 達也

愛子 モブA

翔子 モブB

久保 モブC  
である。

「翔子ちゃん、達也君とBクラスの代表って前に何かあつたの？」

愛子は前の人気が自分の課題に取り組みはじめたのを確認してから振り返り、翔子に小声で気になつた事を聞いてみた。

「・・・うん。詳しくは聞いてないけど、達也が本気で怒つたみたい  
い」

本気で怒つた。そんなことプライドのこだわりもある高校生なのだから多々ある事は承知済みだ。

少しの喧嘩程度ならあせこまでもBクラスの代表を嫌うまで行くとは思えない。

何かあつたに違いない。ボクこと、工藤愛子は確信した。  
この時から探偵工藤愛子の推理が始ま、「らしいからな  
！」

「達也君つー？」

「シッ。田畠中だぞ」

達也は自分の口に人差し指を当てて周囲を見回すよひ田でサイン  
した。

辺りを見回すと、不思議そつてクラスメイト達がこちらを見ていた。  
一部からは妬みの視線もある。

「アハハ、何でもないから邪魔しちゃつてじめんね～

「つたぐ、何が探偵工藤愛子の推理が始まる。だよ。キャラが全然  
違うだろ？」「が

「おかしいな～。心の中で言つたつもりだったんだけど・・・。達  
也君つて心理学者？」

「・・・奥に出てた」

「アハハ・・・は、恥ずかし〜」

「全く愛子は・・・裏でこそひやつても達也なんだから氣づかれに決まってるでしょ?」

「なんだよそれ・・・俺はなんでも出来るわけじゃねえぜ?俺は男を愛する趣味はねえし(ピクッ)行き過ぎた暴力をすることも出来ねえ!-!弟を拷問することもできなああああー?」

「はいはい、国民的アニメのカラリフを変な染色しないでね〜」

ちなみにワンースの十巻の最後の辺のルイの言葉が元だ。はつきり言って面影すら見えないのだが・・・  
なんで優子は気づいたんだよ!?

「葉王の影響で王道マンガはほとんど読んだの。嘗めないで欲しいわね」

それよりAクラスの奴らは愛子が少し大きい声を出したら振り向く癖になんで俺が悲鳴あげても誰も見もしないんだ?

日常茶飯事だからです

また電波だよ・・・本気で憑かれてんじゃねえか心配になつてきたよ・・・

「まあとにかく、あの根本に関しては友人が<sup>クズ</sup>えされたからムカつい

て殴つただけだ。それ以下でもそれ以上でもないからな。あまり詮索はしないでくれ」

嘘は言つてない。紛れも無い事実だ。

友人と幼なじみのちょっとした違いはあるけどな。

とりあえずは納得してくれたみたいで、言い出しつペの愛子と疑問に思つていた他の二人も頷いてくれた。

達也家にて・・・

その後、これといって取り上げることも無く、その日は終わった。

ああそりそり、FクラスとBクラスの試合戦争は協定により休戦になつたらしい。どうせだし忌ま忌ましいBクラスに攻め込んでやろうかともおもつたが・・・やめた。

俺個人の意思だけでクラスを動かすのはどうかと思うしな。なによりBクラスに勝つてもうちにはメリットが無い。あつたいたらそれこそ先程言つた個人的な満足だけだ。

そんな事を考えながらも、フライパンを片手に料理を続ける。

ガチャ

「帰つたぞ」

そんな俺の元に玄関を開けて入ってきた同居人が現れた。

「今日は早かつたんだな。料理一人分しか作つてないぞ？」

「ああ。自分でやるから良い」

暑苦しいような声でそれだけ言って同居人は襖を開けて自分の部屋に入つていった。

同居人の部屋が下の階で俺の部屋が二階。

二階にある他の部屋は将来設計が早いことに子供の部屋にするつもりだそうだ。まったく、三十代後半になつて相手もいなつてのになんで・・・

まあ将来設計が早かつたおかげで俺が自分の部屋で生活出来てるんだけどな。

え？いい加減同居人の名前ぐらい言えつて？  
まずはヒントからだな。

1、皆も知ってるあの人

2、まんま黒いゴリラ

なんでだろう。これだけで悩む必要もなく人物を特定出来る気がするぞ？

とりあえずあの後作つた野菜炒めの一人前と作つていた一人前の豚カツ定食、そしてバナナ一本を食卓に置く。

「一応鉄人の料理も作つておいたぞ？」

「おう。すまんな。だがいい加減俺を鉄人扱いするのはやめろ」「

これで本当に全員分かっただろう。

俺の同居人、それは文月学園の生活指導担当、西村教諭である！！

なにその設定！？

つて思つた人。

これは設定ではなく紛れも無い俺の親戚なんだ。」

「いや、この呼び名の方が慣れてるし、それに週に五回仕事終わったらスポーツジムに泳ぎにいつてるんだからこのあだ名に納得の一言だろ」

「ああ～、学校では公私を分けるならまあいい。それよりだ。何故俺の主食が毎回バナナなんだ！？」

「いや、なんかノリでな～」

「シシと笑う俺に「なんのノリだ！？」と鉄人は頭を抱えた。

「まあそれは冗談だつて、本当はホラ！」

あらかじめ隣に椅子に載せておいたフルーツバスケットを鉄人の前に置いてやる

「・・・もう何も言わないぞ」

「それで？ FクラスとBクラスの戦争はどうちが有利なんだ？」

文句を言いながらも果物を食べる鉄人にそんな事を聞いてみる。

鉄人は生活指導と並びに補習担当である。

『鬼の補習』だと生徒の中でも噂になつており、なるべくお世話をになりたくない。

そんな補習担当だから分かる試合戦争の戦況。

戦争で戦死した生徒は補習室送りになるため、補習室に送り込まれた生徒がどちらが多いかでだいたい（・・・）の戦況は分かるのだ。

「珍しいな。お前から話題を出すとは・・・」

「まあね。俺も今回の試合戦争には興味があるんだよ」

普段は俺が鉄人の例え話に付き合つ事が多いためか、鉄人は躊躇するように俺の方を見た。

「まあいいだろう。興味がある理由は聞かんが変な気は起こすなよ。今のところだが俺のところに来たのはどちらも似たような数だな。あの馬鹿共はBの教室まで到達したよつだしもしかするともしかするかもな。」

「いつまづと面白そうにニカツと白い歯を見せる。  
あれ？ゴコラつて歯は白かつたっけ？」

まあ、鉄人としてもFクラス（馬鹿ども）の下剋上は見てて楽しいんだろう。

それには、若干・・・本当に若干だがFクラスに肩入れしているからな

「だが、あの根本の事だ。何か仕掛けてるに違いない」

「教師の前で生徒をクズ呼ばわりするな、馬鹿もんが。・・・まあ俺としてもBクラスの代表は気に入らんからな。今回は許してやろう」

良いのか、それで。仮にも教師だろうが・・・

「「」うそつきました。・・・そんじゃ俺は簡単にシャワー浴びるから・・・」

「ああ。遅くまでゲームして遅刻したら今度こそ容赦しないからな

「今まで容赦された覚えがないんだが・・・」

一言愚痴を言つてリビングを出る。

それと鉄人は学校では頭が堅いが、家ではよほど変な事で無ければだいたい許容してくれる。

教師は甘やかしたいが心を鬼にして・・・といった話を聞くが鉄人はそれの典型的な例だと思う。

が、ひとつとシャワー浴びてモン ンフロ ティアでもやるか。

人間には家でしか見せない一面もある・・・多分（後書き）

お読みいただきありがとうございました^\_^(—)^\u263a

同居人が鉄人という異様な設定なんですが、気に入ってくれると嬉しいです。

長文失礼しました

## VS、クラスー！（前書き）

どうも、たぬくです。

今日はやつと試合戦争です

なんか長かったような短かったような・・・

では、どう（^O^）～

VS、Cクラスー！

いつもとなんら変わりの無い朝・・・

ガラツ

「私はCクラス代表小山友香！我々CクラスはAクラスに試合戦争を申し込みますー！」

そんな朝はすぐに過ぎ去ってしまうものである。

ドタバタと足音が近づいてきたと思えば、強引に開けられた扉から入つてくる少女。本を読んでる俺があえて言わせて貰えれば興味がないんだが。の一言だ。

にしても小山ってあの小山か？確かに根本<sup>クズ</sup>と付き合つてゐる・・・

「Aクラス代表はどうーーーそれと木下優子も出でなきなさーーー」

Cクラス代表の小山のヒステリックな叫びがAクラスに響く。

「」盐谷だぞ、優子

「達也もじょー」

「えへ、めんべいやそつ

半ば優子に急かされる形で俺は読んでいた本を自分のシステムデスクに置き、席をたつた。

その本の表紙にかけてあつたカバーが置かれた際にピラシととれてしまつた。

その本の名前は・・・

『バカとテスリー』・・・やめようこれ以上先は見ちゃいけない気がする。てゆーか世界観的に駄目だ。

「さつきの声量で聞こえてたんだから前に出でこなくつても良かったんじゃないのか。」

「え、い、五十嵐君！？Bクラスにもいなかつたからもしかしたら、とは思つてたけど本当にAクラスだつたのね！」

クラスの誰も何も喋らないせいか、俺の呟きはCクラス代表に聞こえていたようだ。

しかも、何か親しげである。いや、俺はあいつの事よく知らな・・・

あつ！？

「もしかしてヒステリック小山か！？」

随分と斬新な名前だつたから思い出した。

ヒステリック小山もとい、小山友香、さらに根本恭一は一年時の達也のクラスメイトであつたりする。

そもそも何故氣づかなかつたかは達也の中で彼女はヒステリック小山、という名前の人物だからなのだろう。

「知り合いなの？」

隣を歩いていた優子が不思議そうに尋ねてくる。

「ん？ああ。元クラスメイトだ」

ふうーん。と適当な相槌を打つ優子。

興味ないなら聞くなよ・・・

「あなたは木下優子！？」

あなたよくも私たちを豚呼ばわりなんかしてくれたわね！？」

「えっ？何の事かしら？」

優子に氣づいた直後に喰つてかかる小山。

そんな小山に優子はなんの事が分からぬ、とばかりに首を捻った。

「優子、そんな事言つたのか？」

「いや、そんな事言つた覚えは無い・・・わね」

「だとよ。それが俺達（Aクラス）に試合戦争を申し込む理由なんだつたら、今すぐ撤回しと・・・け？」

優子の様子からするに、本当に本人にもそうな覚えは無いらしい。その事を伝えたかったのだが、伝えたかった人物は何故か拳を震わせていた。

「・・・・ないのに

「え・・・？」

「私なんて名前さえも覚えてもらつて無いのひつ！  
もう豚呼ばわりされたなんてどうでも良いわ！」

開戦は午後1時！首を洗つて待つてなさい！…」

バタンシと来た時より乱雑に扉が閉められ、教室内は静まり返った。

「どうしたんだ？あいつ・・・」

「　　「　・・・・・」　」

なんだろ？クラス全員からの視線が痛い。

俺が何かやつたのか？

いや、やつたとしたら小山を本名で呼んだだけなんだが・・・

「達也、今度くらい名前で呼んであげたら？今の聞いたら翔子だつて許すはずよ」

冷たい視線のまま優子がそう言つて翔子に視線を向ける。すると、翔子も直ぐに頷いた。

「いやでも・・・ヒステリックつて呼ぶのは可哀相だろ？」

なんだろ？、冷たい視線が増えた気がする。  
ついでに背中にあたる殺氣も増えた。

「敵ながらあの子、よく一年間堪えてた、って褒めてあげたいわ」

「堪えてた、って何を？俺はあいつに嫌がらせした覚えは無いぞ」

ため息をつかれた。

なんだよ、この理不尽はなんか一方的に俺が悪いみたいじゃないか！

落ち込んで良いんだよな、これ！

「ここまで鈍感だとは思つて無かつたわ。翔子の事にも気がついて無いみたいだし」「

「つ（。Q。）！？」しょ、翔子はか、勘違いしてるだけなんだ  
よー」

またため息をつかれた。

「もう良いわ。みんな、午後1時からの試合戦争に備えるよつー無いとは思うけど、点数が減つているなんて事があつたら回復テストを受けること。以上よ」

優子はクラスのみんなの方に振り返り、代表らしい激を飛ばす。

あれ？このクラスの代表って・・・俺じゃね？

「まったく達也君はもう少し女心つてものを分かつた方が良いんじゃないかな？」

「いやだから、俺が何をしたんだよ」

今はS.H.R後の休み時間。大抵の人は読書なんかをしている。席に座つて目を閉じてる者もいる。多分彼等は午後から始まる試召戦争のイメージトレーニングでもしているのだろうか？案外、みんなそこまで油断はしていないようだ。

そんな中、俺はいつものメンバーに囲まれていた。

「よく考えてみなさい。私の名前は？」

「は？木下優子だろ」

「ボクの名前は？」

「工藤愛子だろ？」「

優子が突然名前を聞き出したかと思えば、愛子も何か気づいたらしく、また自分の名前を聞く。

「・・・それじゃあ小山さんの名前は？」

「ヒステリック小山」

またまたため息をつかれた。

「ホントに可哀相に思えてきたよ」

「なんで本名が芸名みたいなのよ・・・」

「・・・小山さんはハーフでもクオーターでもない日本人」  
いや、それは俺も不思議に思つてたんだよな。  
でも、ホラ変わった人つているだろ?」

「意識的にそいつ前にしたんじゃ・・・?」

「「「「はあ・・・」「」」

ため息でハモられた。  
なんか悔しい

「で?優子、作戦かなんか考えてるのか?」

この話題じゃ俺が取り付くしまがない氣がするのでとりあえず話題  
を変えることにする。

「特には考えてないわ。戦力差は明白だし、油断しなければ大丈夫  
でしょ?」

・・・案外すんなり話題を変えさせてくれたな。  
なんか怪しい気もしないでもないけど。

「悪いんだけどクラスとの試合戦争でやる」との提案が一つある。

「

「・・・何?」

「ああ。 まずは――」

「来たぞ! Aクラスだ!!」

午後1時開戦の時刻に、Cクラス前の廊下でそんな声が上がった。

「来たみたいね」

まさかあつちから仕掛けてくるなんて予想外。

普通なら戦力の大きいクラスは守りに徹した方が有利なのだけど・

・

Aクラスの代表、五十嵐君は何を考えてるのかしら?

「小山さんー廊下の人員を増やして!」

「もう突破されるの? もう少し頑張りなさいよー!」

ただでさえあの(・・)本隊への人員も残さなくちゃいけないのに、

先鋒隊だけで配置しておいた人員がやられるなんて・・・

「いいからお願ひ！Aクラスの代表が出てきてるのー。」

「え・・・？」

「「「「『試験召喚』！！」」」

『くそつ！援軍はまだか！？このままじゃ押し切られる！？』

Cクラスの男子生徒の一人がそんな呟きを漏らした。

これは本隊が出てくるのは間違いないな。

戦争開始直後、補習室送りにした生徒は油断していた6人。そして残りの廊下にいる戦力は5人。点数が減っているのは戦力外にみなせば3人。予想通りの戦力の配置だ。

俺達の戦力は俺、翔子、久保君、優子、愛子。それにAクラス中間レベルの生徒7人を合わせた12人

廊下の戦力がこれなら本隊はざっと20人くらいだろう。残る10

人は・・・つと

「愛子と優子と久保君、渡辺君と根岸さん、それに佐藤さんは背後からの奇襲にも注意して！！」

大方戦力が減つてきたところを急襲する為にFクラスと交戦中のBクラスやらに紛れてるんだろ。

「あちらの本隊の到着みたいね」

四人に指示を飛ばした後、横にいる優子がそう呟いた  
背後から視線を戻して前に向き直る。すると、Cクラス代表小山を含めた13人がいた。

思っていたより奇襲部隊に戦力を傾けていたみたいだ

「随分と嘗めた真似をするのね」

小山の冷たいような声が廊下に響く。

「残念。俺達はCクラスを嘗めたつもりなんて一切ない」

ピリッとした緊張感の中、俺は思った答えをそのまま言つた。  
嘘は言つていない。

だから、親の仇を見るような目で見られるのは勘弁してもらいたい。

「よくもこの状況でそんな事が言えるわね」

実際、小山の言つ通りこのままなら戦況は芳しくない。

「　「　『試験召喚』……」」

背後から後ろを任せた六人の声も聞こえてきた。

大方、伏せておいた兵をまわしてきたんだろ。

俺の隣で待機している翔子以外のクラスメイトも度々視線を背後に移している。

「なあ、小山。面白い話をしよう。

ある国の軍は戦火に見まわれ軍の強化、兵の増員に困っていたとする。

そんな時、軍の鍛練度の高い国が一時逗留させてくれるなら軍の強化を手伝おう、と使者を派遣してきた。その場合、軍の強化や兵の増員に困っていた国はどうすると思つ?」

そう言い区切るとほぼ同時にAクラスの前と後の両方の扉が開き、Aクラスの生徒がなだれ込んで来た。

「つー? 井岡君、撤退するわよー!」

「まあ待てよ。策がこれだけだったりしきの話は全部無駄だらうが。翔子」

「・・・うん。みんな、お願ひ」

翔子は小さく頷いて首元に付けた盗聴機(気にしたら負け)にそっと呟いた。

瞬間、Dクラスの前の扉が開いた。

「そんなんっーー？」

「小山。さつきの言葉を返せ。本当に嘗めたのは・・・お前達Cクラスだ

Dクラスから現れるAクラスのクラスメイト達。

交渉の為、Dクラスに勉強を教えるのに反対した人もいたが、他人に教える事で余計理解度が高まる事を（優子が）指摘すると、渋々だが賛成してくれた。

もつー回言いたいんだが、Aクラスの代表って俺だよな？

とつあえず

「どうする？この状況じゃ、代表としては早めに負けを認めるべきだと思つたけど？」

あくまでも、代表としては・・・だ。本音としては俺の召喚獣の経験値を稼ぎたいん訳で戦いたいわけだが。あ、バトルマニアでは無いぞ？

「私だつてクラスの代表として勝呼ばわりされた時の無念を晴らさなきやいけないの」

チラツ

「な、何よー？私は何もしてないわよー」

とつあえず背後にいた優子に視線を向けると、優子も話が気になつ

ていたのか、こちらに振り返っていたので見事に視線があつた。

「はあ・・・。まあ、やるしかないわな。

高橋先生、Aクラス代表五十嵐達也、総合科目でCクラス代表に勝負を仕掛けます！！」

「つーCクラス井岡が受けますー！」

Cクラス

井岡 誠一

総合科目 1692点

VS

Aクラス

五十嵐 達也

総合科目 5121点

『なんだあいつの召喚獣！？見たことないタイプだ』

『白い翼・・・だと？厨一要素満載じゃねえか！天使様気取りですか？』

やめろー！俺をそんな目で見ないでくれー！

「なつー五十嵐、お前いつの間にそんな点数をー？」

そ、そういえば思い出した。一年の時、井岡君は俺の前の席だった

わ。

べ、別にショック過ぎて井岡君のことをやつせまで忘れてたとか、そういう訳じやないからな！

「悪いけど君の事は知らないんだわ」

相反する達也の思考と言動だつたが、白い翼をはためかせ一瞬にして井岡君の召喚獣を切り裂き、消滅させた。

「三倍の点数だなんて・・・」

「通常のさんば」・・・Aクラス、霧島翔子、Cクラス代表に数学勝負を申し込む・・・グスン」

わたくしが悪かったです、すいませんでしたあ。

「Cクラス、吉田が受けます！！」

Cクラス

吉田 杏奈

数学 145点

VS

Aクラス

霧島 翔子

数学 409点

一瞬にして一突きにされ、消滅していく吉田さんの召喚獣。

クラス規模でも点数が上のAクラスにCクラスは多勢に無勢。  
もはや風前の灯になっていた。

「Aクラス五十嵐達也。再度Cクラスの代表に総合科目で勝負を申し込みます」

「つー試獣召喚…」<sup>サモン</sup>

「承認しました」

元々広がっていた総合科目のフィールドにゅっくじと舞い降りて小山に視線を向ける召喚獣。

結果は言つまでもなく、試召戦争はAクラスの勝利で終結した。

「それじゃあ戦後対談でもするとしますか」

補習室に連行されていたCクラスの生徒達も戻ってきた。

俺達（Aクラス）が言うのはなんだが落胆の色が顔に出ている。

「…………」

小山は俯いたまま教卓用に用意された椅子に座つてゐる。

「まず、最初に言つておきたいんだが、お前達を豚呼ばわりなんて木下はしてない。本人も本当に記憶に無いようだし、恐らくはFクラスの木下弟が成り済ましでもしていたんだろう」

『じゃあ俺達がAクラスに挑んだのはお門違いだつた訳か?』

「まあ、そういう事になるな・・・」

「??.??.?」

どうして、と言いたそうに顔を上げて田を白黒させる小山。  
私の私情が最終的な原因なのよ?ってところか?

そんな彼女にとりあえず待て、と手で合図をした。

「普通だつたら設備を落とされるのがルールなんだが、そんな事をしてもはつきり言つて俺達にメリットがある訳でも無いし、お前達Cクラスに怨みをかうのもはつきり言つて『ゴメンだ』

「「『!?!?』」

ザワザワとCクラスの生徒が動搖の声をあげる。

さらには教室の端に立つてゐる優子の顔が俺に呆れの視線を送つていた。

ちくしょつ・・・ちやんとフオローハヤッたの。△

「まあ条件もある訳だけどな」

「・・・言いなさい」

条件といつ言葉に一気に静まり返る△クラス。  
負けたのに責任を負わないとでも思つてたのかよ。

一応、『戦争』だぞ、コレ

「まず一つ目。半年の間、俺達Aクラスに攻め込まない事。  
二つ目。さつき話した木下の件だが必ず信じること。最後は敗北していない事を良いことに戦争の引き金になつた△クラスに試召戦争を挑まない事。この三つだ。これを守れるなら和平交渉にて終結つて事にしても良い。破格の条件だと思つがどうだ?」

『もううん受けよう。良いよな代表!』

『これで設備が守れるなら万々歳よ!』

一つ目の条件は普通だとして、残りの一一つは明らかに私情がはさんであるから、少し△クラスの皆に後ろめたい氣もするが、まあ大丈夫だろ。・・・多分。

クラス全員が了承の声をあげる中、小山は椅子に座つたまま無言でこちらを見ていた。

・・・あれ?怒らせたか?

小山は数秒経つてからスッと田を開じて嬉しそうに微笑んだ。

「全然変わつてないのね。良いわ。いや、その条件でお願いするわ

「そりゃ。それじゃあやつこいつ事こじておくか」

優子に視線を送り、Cクラスから出よつと扉に手をかける。

「五十嵐君」

「ん?」

「ありがとう」

・・・な、なんか感謝されるつて背中がむず痒いんだな。  
今、それを実感したよ。

「どういたしまして、友香」

「...?」

『なんですか、このラブシーンー?』

『う、うるせー!』

そんな声が今、出てきたCクラスから聞こえてきて思わず顔を羞恥で真っ赤にする達也。

優子に冷やかしの目で見られながらもAクラスの教室に入つていく

の  
だ  
つ  
た。

## VS、Cクラスー！（後書き）

お読みいただきありがとうございました（^\_^）

次回はやっとFクラス戦に入ると思います。・・・多分

それでは、また（^○^）ノシ

転生者葉王?（前書き）

どうも、たぬくです（^ ^ O ^ ）

誠にすみません。前回後書きで書いたFクラス戦まで行きませんでした。

これからはもっと慎重に発言しますm(—)

では、どうや(^ ^ O ^ ) -

## 転生者葉王？

「あ～、失敗した。勝手に名前なんて呼ぶんじゃなかつた」Cクラス戦後、黒髪の少年、達也は自分のシステムデスクに突っ伏していた。

思い返してみると、彼の言つた言動は、彼氏（根本）のいる彼女（友香）にとって、変な誤解を生んでしまう產物でしかないのだ。

いくら俺があいつ（根本）を嫌つてもやつちやいけない事もある。それが素で起きてしまったモノもあるため、余計罪悪感も大きい。

「安心しなさい、間違つても小山さんが嫌がる事は無いから」

「そうかあ？・・・それなら良いくんだけど」

そんな達也を見兼ねた隣の席の優子が励ましてみるも、達也の不安げな様子は変わらない

この時間Aクラスは試召戦争後の回復試験を控え、一部（達也）を除く生徒全員が自分のリクライニングシートに座り、自主学習に励んでいた。

そのため、達也の声は教室に響き近くの生徒達の集中力を少し乱していたのだ。

その意図を汲み取ったのか達也は一息ついた後、自分の鞄からノートを取り出し先日に行われた授業の復習を黙々とやり始めたのだった。

時は過ぎ、

よつやく、今日中に行われたテストをやり終えた達也と翔子。

たいして点数が減つていないが念のため、といつやつだ。

今更ながらなんで総合教科を選んだんだよ、3時間前の俺・・・。

教室には総合科目を使用した数名の生徒。

それとDクラスに教えていて何かしらの成長を自覚し、同じく全てのテストを受ける生徒もいた。

ちなみに優子や愛子、久保君などのほとんどの生徒は、1、2教科の回復試験を受けた後、部活に行くか、帰宅していった。

「ふう・・・」

3時間ぶつ通しで強張った体を伸ばした後、筆記用具を鞄にしまう。

・ 帰つたらとりあえず雄一から借りた黒騎士物語をやつて、その後・

今までゲームに熱中し続けた理由が雄一の嘘だったと分かつても達也はゲームを熱心にやり続けている。

曰く、はまつちまつたんだから仕方ないだろ？

そんな訳で今日もまた帰宅後にするゲームの予定をたてているのだった。

『「、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

そろそろ帰宅しようか。と鞄を持ち上げた時、達也にとつて実に不愉快な声が廊下から教室に聞こえてきた。

Aクラスの生徒達も鞄に入れようとしていた荷物を片手に不思議そうに廊下の方を向いていた。

『スカート』という単語の入った防音の教室にまで聞こえる男子の大声だ。不思議、いや嫌な気分にしかならないのだろう。

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本め！よくも俺にこんなことを――』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

と、先程の男の声と違う男の声の言い争いに達也はピクピクと頬を歪ませ不機嫌なオーラを放ちながら持ち上げた鞄をまたシステムデスクに下ろし、スタスターと扉の前に歩いていく。

そんな不機嫌オーラ全開のの達也の姿に残っているほとんどの生徒が苦笑いをしていた。

ガラツ・・・・・・・・ガラツ（扉がゆっくりと開けられる音）

「よひじそいらっしゃいましたクソ野郎」

「ヒ、ヒツー？お、お前は五十嵐！？」

扉が開かれた時には既に扉の前にいた達也は、予想の範疇を越えた根本の服装に目を白黒させた後、無意識の内にまるで下賤なものを見るような目で根本を見下していた。

いや、これは予想以上にグロいヤマジで・・・

「それで何の用だ？用がないなら帰つてくれないか。気持ち悪い」

「クッ。お、俺はBクラス代表根本恭一だ！」

「知ってるよ、んな事。それだけなら早く帰つてくれ。気持ち悪い」  
「そう言つて達也は扉を根本」と（・・・・）閉めよつと扉に手をかけた。

ちなみにAクラスの面々は達也の豹変ぶりに思わず絶句しながらその光景を見ていたりする。

「ま、待つてくれ！俺達BクラスはAクラスに宣戦布告するつもりなんだ！」

「へえ。やう雄一に伝えてこいとでも言われたのか？不様だなあ。

去年罵倒していたやつにパシられてんじゃねえか。

言つただろう？お前じや雄一の足元にも及ばねえんだよ。気持ち悪い

い

もつ最早、気持ち悪いを根本の代名詞として使いはじめた達也。流石にやりすぎという感もあるが、予想の斜め上を行く女装で現れた根本に田頃から聞く根本の悪評で溜まっていたストレス（根本へのいらつきパラメータ）が限界に達したらしい。

「それで？用はそれだけか？ならとっとと帰れ。気持ち悪い

「わ、分かった！すぐに帰るー。」

今にも扉を根本ごと閉めそうな達也に根本は苦虫をかみつぶしたような顔をして自分のクラスに帰つていった。

「・・・はあ」

「・・・お疲れ様。演じるのは大変」

席につき、身をリクライニングシートの背もたれに委ねて、今まで入れていた力を抜く。

そうして一息ついていると、いつの間にか隣には帰宅する準備を終えた翔子が立つていた。

「別に演じてるつもりはないよ」

「・・・演じてる」

「別に「・・・演じてる」あ～、俺の負けです～。もうなんで分かるんだよ翔子は・・・。やっぱり幼なじみとしての勘つてやつなんか？」

「・・・違ひ。妻としての勘」

「やつ向も無いまご」

「・・・なら」の婚姻届に実印を押す

「いやなんで婚姻届が鞄から出でてくるとか、俺の部屋に保管していた朱肉と実印があるのか、とかなんでさつ きまでの脈絡で、なら婚姻届に・・・になるのか、とか突っ込みビンゴがありすぎる・・・」

「

そんな事を言いながらもきちんと突っ込んでいるのだから流石だ。

明日、いや明後日か・・・  
明後日にやつと誤解が解けるんだ。

「・・・へビうかした? 悲しそうな顔をしてる」

・・・悲しい、んだるうか。一年の時から計画してたつてのこ、なんで直前になつてびびつてるんだろ。

「いや、なんでもない。少し考え方をしてただけだから」

「・・・分かった。それなら良い」

数人が教室からでていったのを見てから、確認の為に時計を見た。

午後5時29分

あ、俺の誕生日だ。

・・・変な事を考えた俺が憎い。

でもなんかの数字で自分の誕生日が一致するとテンション上がらないか？

上がらない？

・・・すいません、調子乗りました。

「そろそろ帰るか。今日は買い物があるから途中まで良いか？なんなら送つてくれビ・・・」

「・・・ついていく。もう家には連絡した」

翔子はスッとわざまでメールを打っていたのか携帯を鞄にしまった。

・・・いくらなんでも行動が早過ぎないか？

機械が苦手な筈の翔子が、あれほどの速さでメールを打てるなんて・

・・絶対におかしい

「・・・酷い。ちゃんと打てた」

怒りました、とばかりに先程鞄にしまった携帯を出して血糊げに送信トレイの一番上のメールを見せる翔子。

心の中の声に何故翔子が気づいたか、とかはスルー。なんか今更す

ある。

宛先 新井 里美（翔子専属のメイド）

題名 帰らない

本文

「えつ！？帰らないって、家出みたいじゃねえか！」

「・・・大丈夫。新井さんは私が帰らない時は達也の家つて分かつてるから」

「いや、全然大丈夫じゃないから！帰らない時はなんで俺の家なんだ！？そこのこと詳しく！」

「・・・それは恥ずかしくて言えない／＼／＼

は、恥ずかしくて言えな・・・／＼／！？何されるんだよ！？俺は！  
な、なんだ！？この胸の高ぶりは？  
い、いや駄目だから！

絶対に駄目だから！

絶対に絶対に駄目なんだから！－

結局、

達也の必死の説得で翔子は買い物の後、自分の家に帰る事になった。

回復試験、及び自習だった一日を挟んだ二日後。

「だりい・・・」

達也は自らの体調の不良具合に苦しんでいた。

「大丈夫？ 昨日までピンピンしてたわよね。まさか徹夜でもしたの？」

ギクッ

優子の言に体を震わせ、

「い、いや・・・ 昨日は夜中に起きてしまって・・・」

「団星みたいね・・・」

言を構える達也だったが言葉を震わせている時点で効果は一切無かつた。

まったく何をやっているんだか……と呆れの視線を送つてくれる優子。実の事を言つとエクラスと戦争を行うのは恐らく明日だから、体調を崩さないよ。アリス。

と俺が檄を飛ばしたのがちょうど昨日だったので。

「……返す言葉もないかもしれません」

「そんな遅くまで何をしてたのよ……」

「禁則事項です」

達也はどこかの未来少女の言葉を使つた！  
周りからの視線が冷たくなつた！

「じょ、『冗談だつて！ゲーム』『ゲームなんて言つたら殴るわ』……  
は、はははゲームなんて夜遅くにやつてた訳ないじゃないか

「……達也、これは何？」

今まで聞くだけだった翔子が鞆から「ソノソノ」と一枚のディスクを取り出した。

そのディスクには堂々と黒騎士物語、と赤い文字でかかれていた。

「う……しまった。寝ぼけてたから隠すのを忘れて……」

ゲームを翔子に捨てられて以来、部屋の翔子の手の届かないところに隠しながらもこそそと続けている達也。

「ふーん。寝ぼけるまでやつてたつて事で良いのよね？」

「くつ・・・つい口が滑つて・・・つて待て優子！それは殴りじやなくて関節技ああああーー？」

ボキッ

僕へも達也の間接は一本、また一本と外されていくのだった。

「おはよー、皆。つて達也呼びつけたのーー？」

「か、間接が・・・」

「間接？つて事は優子がやつたんだね？なんだ、びっくりしきつたなあ」「

なぜか優子にやられた、と分かるとホッと安心する愛子。  
なんでお心したんだ、今！？絶対におかしい！俺は死にかけなんだぞ！？なあ！

「おはよー、ひよこ愛子」

「・・・おはよー」

「おはよー、優子に翔子ちゃん。」

床で俯せで倒れている俺を無視して、のどかに挨拶を交わす三人。  
なんだろう。俺が背景みたいに扱われている気がする。あれか？俺  
つていらないのか？ねえ。・・・グスツ

「そういえば優子。達也君はなんで倒れているのカナ？」

「ああそのこと？このバカは自分で言ひたくせに徹夜でゲームし  
て体調崩してゐみたいでね。ちょっとお仕置きしただけよ」

それを聞いた愛子は楽しげににやめ、と笑みを浮かべる。

「ふーん。災難だつたね、達也君。お詫びとは何だけど僕のスカー  
トの中でも覗いてみる？」

「ひーーー？」

バツと床に俯せていた頭をあげる。

ガシツ

「ヒツー？」

「・・・浮氣は許さない」

「頭がああああー!？」

が、男として見たかったものは見えず、翔子のアイアンクローニよつて意識を落とした。

「達也、具合悪いんなら保健室に行つてきたら? 薬飲むだけでも結構違うわよ。」

「今は体調より俺の頭蓋骨と全身の間接が心配です」

「アハハッ、確かに頭蓋骨と間接は保健室じゃ治せないよね」

「もういい。少し保健室行つてくる。下クラスの奴らがきたら上手く対応しといてくれ」

三人が頷くのを確認してから、節々が痛む体を引きずりながら保健室へ向かうのだった。

一方、Fクラスでは・・・

「まずは皆に例を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」

壇上で雄一が実にらしくない様子でFクラスの皆に礼を言っていた。

「や、雄一、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思つ。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」「普段そんなことを言わない雄一のらしくない、本当にらしくない(大事なので一回言つた)言葉にFクラスの生徒達も胸が一杯になつてゐるだろう。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないといつ現実を、教師どもに突き付けてやるんだ!」

『おおーっ!』

『やうだーっ!』

『顔だけじゃ・・・ゲフンゲフン勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の一人はどこかの誰かに怨みがあるらしい。

クラスの皆が団結して声をあげる様に、葉王は一人目を輝かせてそれを眺めていた。

前はこんなクラスじゃ無かつた。

もちろん、前というのは葉王の転生前でのクラスのこと。

こんなバカが一杯いる騒がしいクラスでも無かつたし、男女の間に大きな壁があつた。友達はみんな「あんな奴らうるさいだけよ」とか言つて、コミュニケーションを取ろうともしなかつた。

僕もそれに賛同していたし、その通りだと公言したこともあった。だけど、たまに協力してやつたらどうなんだろう?なんて思った事もある。

主に文化祭や体育祭の時だ。もちろん、協力しようと頑張ってくれる人もいたし、いつもから分け隔てなく話してくれる人もいる。だけど結局クラスは纏まらないし、男女の仲の溝は深まるばかりだった。

そんな時、よく通っていた書店で、この世界に来るきっかけ。『バカとテストと召喚獣』の本を初めて手にとった。

友達も側にいたから少し目を通しただけだったけど、本の中に書かれた世界に僕——私は惹かれた

そんなこんなで気づいたら売っていた3巻までを買つていて、どんどんとアニメとかマンガの世界にのめり込んでいったんだけど……まあ、それは置いておいて……

その一次元の空想でしかなかつた憧れの場所に、いま、僕はこうしている。それがたまらなく嬉しくなつて、僕は眞とは違う思いで胸が一杯になつっていた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちでは日本史でフィールドを限定するつもりだ」

「霧島さんが日本史で苦手なんて聞いた覚えはないんだけど、どうして日本史を?」

理由は分かつていろけど流石に空氣になつてる氣もするので口を挟む。

「ん? 葉王か。ボウツとしているようだつたが、話は聞いてたのか

アハハ、藪蛇だつたみたいだ。話を聞いていないと見ていたのか雄一は田を細めていた。

「まあね。それでなんで日本史を?」

「まあ待て。まずは条件だ。その条件は小学生程度のテスト。方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試合戦争は、テストの点数がだいたいの勝敗を決定する。だから、テストの点数を使った勝負なら、採用される。

「でも同点だつたら延長戦だよ? そうなつたら問題のレベルも上げられるだらうし、ブランクのある雄一には厳しくない?」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ? 幾らなんでも運にそこまで頼り切った方法を作戦と言つものか」

「ならその方法が作戦だと思える理由を勿体振つてないで言こなよ」「葉王の言つ通りだな。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えるとしつているからだ」

学年首席の確実に間違える小学生レベルの問題。

それを聞いて、全員が何の問題かを期待を高ぶらせて口を開じる。

「その問題は——」

転生者葉王？（後書き）

お読みいただきありがとうございました（^ ^ O ^ ）／

では、また次回で！

## 前例の無い宣戦布告（前書き）

すいません、テスト勉強で投稿遅れましたm(\_ \_)m

今回はバカテスっぽいナニかつてのが正しいかも。

それではどうぞ( <O> ) /

## 前例の無い宣戦布告

翔子Side

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

雄一は達也の言った通り、Aクラス代表に一騎打ちを申し込んでき  
た。

対して交渉の席に座るのは優子。私が行こうかとも思つたけど、喋  
るのがスローペースの私よりは優子の方が良い。そう思つたから優  
子にお願いした。

雄一の他にはクリーム色の髪のバカっぽい男の子と、姫路さん。そ  
れと優子にそっくりの・・・多分、優子の弟さん。でも男の子には  
全然見えない。他には目立つ青色の髪の男の子。カメラを隠し持つ  
てる静かそうな男の子。

カメラは持つてきちゃ駄目なのに 盗聴器とスタンガン持つてきて  
た人

「うーん、何が狙いなの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

確かにそうじやなきや宣戦布告はしないと思つけど優子はそれを聞  
きたい訳じゃないはず。

「・・・ふーん。まあ良いんじゃないかな。『達也が『負けるとは思えないし』

「　　？」

凄く嬉しそうにFクラスがしている勘違いを否定する台詞を場に居るFクラス全員に聞こえるようにわざと大きく発言する優子。

優子は多分すつじSなんだと思う。驚愕して呆ける雄一達を凄く楽しそうに見てゐるのも証拠の一つ。

「ま、待て！Aクラス代表はそここいる霧島じやないのか！？」

こちらに指を指してくる雄一。幼なじみの私にでも社会マナーは守つて欲しい。それに幼なじみなんだから、名前で良いのこ。

「あら違つわよ。翔子は学年次席なんだから。ね？」

優子は絶対に楽しんでる。

そんな事を考えながらも、とりあえず優子のふりに頷いて返す。

驚きの事実に驚愕するFクラスの人々。

「言つたじゃないか、雄一！前に立つてたのは五十嵐君だったって！」

「つむせえ！回想部分のせいで書かれもしなかつたくせに威張るな、バカ！だいたい明久の言つことは信じ難いんだよ！」

「バカつて言わないでよ…それより雄一だつてそんな馬鹿みたいな事（メタ発言）を言つてるじゃないか！」

一人して罵声をかけあつ。あの子は雄一と仲が良いみたい。だつて達也と雄一はいつもああだから。

喧嘩するほど仲が良いつて言葉もあるから絶対そう。

「ところで、△クラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄一が腕を組み、顎に手を当てながら聞く。だけどクリーム色の髪の子と言い争つたのを田の前に見た私達としては、違和感以外の何物でもない。

「別に試召戦争の方法はもう決まつたんだし、そんなことを話さなくとも良いと思つけどな？」

「・・・聞き方を変えよ。なんで△クラスとの試召戦争を△クラスの勝利で終わらせなかつたんだ」

達也が言つていた通り、雄一は試召戦争の方法の変更を狙つてゐるのかな？

でも優子は簡単に譲る氣はないみたい。

「・・・まあそれくらいは良いかな。それは代表の独断だよ。何か考えがあるみたいだつたけど教えてはくれなかつたよ」  
教えてはくれなかつた。

それは嘘じやない。

だけど、私達、少なくとも優子は達也の意図に気づいてるはず。

そこで雄一は初めて顔に難色を示した。

雄一のあの顔は本当に久しぶり。幼なじみの私から見ても凄くリア度が高い。達也に見せたら嬉しそうに笑うと思つ。

だから・・・

翔子は自分のシステムデスクに置かれた鞄からあまり使っていない携帯を取り出し、カメラモードを起動した。

パシャッ

「ひー、おひー!?

「・・・惜しい。雄一、もう一回同じ顔をして?」

「あいつに送られると分かって撮られてやるような馬鹿じやねえ

「・・・残念」

達也が喜ぶの・・・

ガラガラッ

私が携帯を下げて雄一が安堵のため息をついた時、教室の扉が開いた。

「ん? 雄一達来てたのか」

「まう・・・分かつていてたくせによく言ひつけねえか

そこには保健室で薬を貰つてきたであろう達也がいた。

Side out

「優子、交渉役は俺が変わらひ」

「分かつてゐよ。大変だつたんだから後で何か齧つてね」

「・・・あ、ああ。食券で良いだら?」

「うん」

俺と入れ違いで交渉の席を立ち、嬉しそうに翔子の方に優子は歩いていく。

・・・猫かぶりもこ」まで来ると見上げたものだと思つ

「それで? 試召戦争の方法は決まつたのか?」

いらない思考を振り払い、未だに怨念がまじい目で見てくる雄一にそう問い合わせる。

この様子だと代表が翔子じゃない事に気づいたばかりひとつにひつか。

「まだだ。だがとりあえずは代表同士の一騎打ちを基盤に置いて話しえつてた」

「へえ。それじゃあお前はその代表同士の一騎打ちではなく、それを派生したやり方で試召戦争がしたい・・・ど。そういう事が」

「ああ。誰かさんのせいで当初計画していた作戦は水の泡になつち  
まつたからな」「

「ヤリと口元をあげ、ほほ包み隠す事なく嫌み、兼挑発を達也にぶ  
つける雄」。

対して、まるでゲームをしている子供のように凛々とした笑顔で雄  
一を見据える達也。

互いの事を理解しているからこそ、歯に衣着せぬ構えで二人は相対  
する。

「それは事前に調査をしていなかつたお前達が原因だと思うが？」

「わざわざめぼしい生徒や先生全員に口止めまでしていた奴が良く  
そんな事を言えるな」

「チョッ。バレてたか・・・一応、人伝いにしておいたんだが・・・  
ああ勘か。

見事にはめられたみたいだな」

そうは言つが達也の顔は後悔した様子には見えないし、相迎えの席  
に座る雄一の表情は一向に好ましくならない。

その他の生徒はそんな二人の会話による表情の変化を食い入るよ  
うに見ていた。

「さつき木下にも聞いたんだが、Cクラス戦をAクラスの勝利で終  
わらせなかつたんだ？風の便りでは圧倒的差だつたと聞いたが？」

「フフッ。雄一の考へてゐる通り、教室の変更を行わなかつた事で恩義を感じてゐるDクラス、それにあの根本率いのBクラスへの奉制の為。

まあ、個人的な感情が理由つてのもあるけどな

「当初はDクラスだけへの奉制だつたんだが、一石二鳥になつて良かったよ」とさらに付け足す。

やはり・・・と思案顔の雄一の隣で吉井が不安そうに雄一を見つめていた。

他のFクラスの生徒も不安げな顔は隠せない。

「だがDクラスがCクラスへ宣戦布告した場合ビリする? Bクラスと戦う羽田になるが・・・?」

「まあ確かにあの根本<sup>クラス</sup>のいるクラスとは生理的にやりたくない氣もしないでもないが・・・」

「別にやつても良い。と、そういう事か?」

「雄一は片足をもう一方の足にのせて挑発的にそいつ言った。

「まあな。確かにクラスの過半数が拒否をしなければ俺は別にBクラスと殺り合つても良いと思つてる。

Bクラスが攻めてきたなら、その時はその時でクラスの殺る氣は高まるだろ<sup>クズ</sup>うからな

特に根本<sup>クラス</sup>がAクラスに女装して來た時に居た奴は特にそうだろ<sup>クズ</sup>う。やるか分からぬ場合なら避けたいが、やるのが決定しているんだつたら早く関わる事をやめたいだろ<sup>クズ</sup>うし、本気で殺つてくれるだろ。

「・・・・・」

「雄一、もう圧力を種々交渉するのは諦めるんだな。はつきり言ってお前に俺達Aクラスを脅せる手札は無いはずだ。」

もちろん、あちらにはあの寡黙なる性識者<sup>ヒツヅリーナ</sup>がいるんだ。個人的な（女子絡みの）手札ならいくらでもあるだろう。だけどAクラス全体を動かすのは難しい。多分、優子や翔子はその程度びくともしない。・・・多分

「腹を割つて話せ。そいつすれば考えてやらなくもない」

「・・・・・・」

手を頭に当てて思案する雄一。それを達也は面白そうに見ていた。

達也としては答えは決まっているのだ。  
それながらも思案する雄一に、今までにやり込まれていただけに憤<sup>ブシテ</sup>を晴らすにも良い気分転換なのだ。

両者が沈黙したまま身動き一つしない時間が数秒続く。そんな中、最初に動いたのは――

明久だった。

「雄一、君の犠牲は無駄にしないつ――！」

「ま、待て明久！なんでカッターなんかを俺に向けるんだ！？」

「さうだぞ、吉井。カッターだと腹を切り裂く。だろうが……腹を割るに2セトラックを時速100キロ突っ込ませないと……」

「反論する点はそこじゃねえだろ？　俺はお前が分からなーいっ！」

「思つてみればそうだね。それじゃあ鉄人を呼んでくるよ……」

「待て明久！　お前は盛大に勘違いをしてるつ！」

（注）一部生徒の共通概念

鉄人……人の皮を被ったナニカ

「離してよ雄一！　君のその思いは無駄にしないからつ……！」

まだまだ続きそつなので閑話休題……

「それで話を戻しても良いか？　達也」

「おう。良いぞ～」

どうにか場が治まつたところで雄一が額に筋をたてながらも、話を切り出した。

「えっと……確か雄一が腹を割つて話すんだよね」

「お前は本来の目的を忘れて悪ノリしてたのか明久・・・」

それもそのはず、達也と明久の雄一への仕返しは日頃の鬱憤を晴らすようにエスカレートしていったのだから（一応どれもまだ未遂）

「それで雄一。お前が考えている条件を教えてくれ。さつき言った通り、それがそのまま通る可能性もある」

「ああ、お言葉に甘えて言わせて貰おう。対戦方法は6対6。タッグ戦を含めた三点先取の五戦。対戦教科は全て俺達Fクラスが決めさせて貰いたい」

「6対6のタッグ戦有り・・・か

タッグ戦。

確かに試合戦争の回数の分、コンビネーションの点を取ればタッグ戦はFクラスが有利だな。うん、盲点だった。

「分かった。その対戦方法は受け入れよう。だが、対戦教科をそちらだけが決めるのは賛同しかねるぞ。

せめて2つが俺達。三つがお前達が決める。それがこちらとしても限界だ」

「・・・分かった。それで頼む」

「開戦は？」

「午後1時で良いだろ？。場所はAクラスで頼む」

すらすらと試召戦争の予定が決まっていく。

日頃からこういった意見ではまとまりやすい二人。

「ああそうだ、雄一。人掃いをたのめるか？少し個人的な話がしたい」

「……分かった。」

「翔子に優子、吉井達をあっちの席でもてなしてくれないか？」

「……分かった（わ）」

翔子達一人は達也が指差した教室の後ろにあるくつろぎ用のスペースに吉井達を誘導してくれるか、と頼むと快く了承してくれた。

「そんじゃ雄一。俺が話したい事が分かるか？」

Fクラスの生徒を含めた周りに居た生徒が近くから離れたのを確認してからそう切り出した。

「……さあな？見当もつかねえよ」

「そうか。なら单刀直入に言おう。朝倉の事だ」

「…」

明らかに聞く気のなさそうな雄一の目が一気に変化し、興味のある事を聞いたそうな目で、俺の顔を見据えていた。

「これで見当はついただろ？？さらに言えば、FクラスがDクラス

に試合戦争で勝つた日の話だ。」

「……いや、見当なんぞつこてねえよ」

「……はあ。去り際に俺に取り付けた盗聴機で聞き取った会話を翔子に渡す前の受信機から聞いたはずなんだが……？」

スッと目を細め、僅かに視線をそらす雄一を見む。

あの日の帰りに翔子から没収した受信機に録音されている音声を聞いたが、俺と朝倉のDクラス内の会話は録音されていなかつた。

疑問に思つてた点は、雄一のいたずら（これ決定事項）なんだから、間違いなくあの教室での会話を重視して録音しているはずなんだ。だから、後半だけを録音したつてのはほぼ有り得ない。

何てつたつてあの空気だった訳だし、翔子に聞かせて俺が悲惨な目に会つ内容だつたら教室内での会話の方が話される可能性の方が高い訳だから。

それなら何故録音されていなかつたのか？ 会話をリアルタイムで聞いていた雄一が消したから。

この疑問にはこの答えが一番しつくりきた。

つて事は雄一はあの会話を聞いていたはず。

だから、

「別にお前まで信じろなんて言わない。だけどあいつが前に進むのを躊躇したら背中を押してやってほしい」

「・・・はあ。何を言つても聞く耳無しか。」

「知つてゐてのに」まかす奴が言つなよ

達也の言葉に雄一は、めんべくたれつて頭をかいて、頷いた。

「あ～、分かつたよ。俺の出来る限りの事はするようとする。」

「・・・悪いな」

「しかし、お前が翔子以外を気にかけるなんて珍しいな」

先程の態度とは一変して一や一やとした笑みを浮かべて雄一は尋ねてくる。

「失礼な。朝倉に関してはどちらも他人とは思えないだけだ。他意はないよ

他意なんか無いさ。

うん、他意なんか無い！

そうだ他意なんか無いはずなんだ！！

他意なんか無いと良いなあ

「や、そんじゃ朝倉の事はけやんと頼んだからな」

「ああ分かったよ。ああそりゃ、賭けをしないか？達也」

「雄一は立ち上がりと片手をリクライニングシートのサイドに載せた所で動きを止めた。

「ん？ 賭け？」

「ああ。今回の試合戦争での勝ちクラスの代表は、負けクラスの代表に一つ命令が出来る。もちろん、その命令は絶対行使だ。」

「へえ。面白そうだ。分かった、受けて立とう」

「それじゃあ決まりだ」

先程のニヤニヤとした笑みでも今の雄一の笑みは何か悪知恵が働いてる時なのだ。

そんな笑みをしたままリクライニングシートから立ち上がり接待を受けていたFクラスの生徒達と自分のクラスに戻つていった。

・・・決戦は午後1時か。

## 前例の無い宣戦布告（後書き）

お読みいただきありがとうございました（^\_^）

宣戦布告で一話（五千字）使うなんて・・・

文才が無い（泣）

それではまた（^\_O^）ノシ

やう、これが俺達の戦争だ！（笑）（前書き）

お久しぶりです、たぬくです。

長らくお待たせしてすいませんでした。

これからも円一とかになるかも知れませんが投稿していく予定です。

では、さうぞ（^〇^）ノシ

もう、これが俺達の戦争だ！（笑）

「それではこれよりFクラス対Aクラスの試戦を行います。両者準備は良いですか？」

「ああ」

「はい」

俺と雄一、二人の応答を受け、高橋女史がゆっくりと手を挙げ……

Fクラス

VS

Aクラス！！

高橋女史の背後にあつた巨大なスクリーンに大きく文字が映し出された。

なんでAクラスだけ「！」が付いているのか？しかも二つも。  
……どうやら高橋女史のやる気は充分らしい。

噂じゃあクールビューティとか言われてるけど案外お茶目な方である。

「どうだ雄一？ ひみつの担任のクーデレぶりは。」

「悪くないな。まあ、今日から俺達の担任になるんだ。今のうちに

「やつてみりつてんだ」

一人してニヤニヤとした笑みで相手を見据える。  
客観的に見ればただの痛い奴らである。

「それでは一回戦の4名は前に出て来て下さい」

俺達二人が踵を返して席に座ると入れ違いに両陣営から一人ずつ前にでて……

ガラツ

「雄一、僕はなんでこんな格好で戦わなきゃいけないの！？」

「　　……」「

「ねえ達也。私達はアレと戦わなきゃいけないの？」

「わ、私は五十嵐様の為なら火の中水の中、どこへでも！」

音を立ててAクラスの扉が開かれた。

そこから現れたのは、オトナのオトモダチに人気？ のセーラー服を着た吉井明久だった。

これは……まずい（イロイロな意味で）

「あ、ああ。気にしないで戦ってくれ！頼むぞ優子に佐藤さん」

振り返った一人に激を飛ばす。確かに陽動作戦としてはつきり言

つて効力は高いだろ？ 無駄に似合ひすぎてる気もしない……訳ではないが。

……本当に！？

決して可愛い女の子だなんて思わなかつたんだからなつ……

そ、それより今は

「離してくれ五十嵐君つー僕は……、僕はつー……」  
「……出で行かなかつたら一生後悔する……」

いい感じにキャラ崩壊しやがつてゐることをどうにかしないと……

「……仕方ない。久保君、APP5枚だ」

「つーそれでも僕は……」

「7枚」

「もう一押し……」

「分かつた。なら10枚だ」

「……フ。手を引くじゃないか」

久保は眼鏡を右手の指で押し上げ、席に座りなおす。

吉井が入ってきた時からの力が一気に緩まり、俺はホッと胸を撫で下ろした。

それにもしても……

雄一も小瀟な手を使う……お陰で今月の終わりに出るゲームを買つまで鉄人の主食がまた果物になつてしまつじやないか。いつもです。

まったく、久保を姫路に当てないと姫路に勝てるのは、俺か翔子しか……

……あれ？

むしろ無理に愛子と久保君出さないで俺と翔子が前に出てさつあと勝負決めちまつた方が良かつたんじゃなにか今更である。

いやでもほら！——最高クラス（え~くらす）としての誇り（笑）みたいな、ね？土屋も居るしさ！

とりあえずそういう事にして欲しいらしい。

さて、話は戻すが優子達の試獣戦争である。

「……」

「……お願いだからそんな目で見ないでっ！？僕は雄一に無理矢理！」

「明久、お前あんなに嬉しそうに着てたじやないか

「待て雄一一貴様僕の印象を下げる様な事を…？」

「安心しろ。吉井。お前の評価は下がる事は無い」  
バカ

「非道」つー……

泣きじやぐるよつに落ち込む明久。

ああ、世の中はなんて非条理なんだらう。

黙れ

「あの、そりそろ始めても?」

「あ、はい。すみま「待つてください。もう少し時間を頂けますか?  
?」「……?

俺の答えを遮ったのは、奇しくも優子。あの極悪非道の魔・  
ブギブギブギブギ

「なにすんだよつー?」

「変な事考えてたでしょ」

「ソンナコトナイヨ?」

「へえ……。そつなの

メキメキメシツ

アツ

!-

「秀吉、ちよおつと話があるんだけど来てくれる?」

「いや姉上。彼の事は良いのかの・・・?」

余りにも明久が強烈過ぎたため田には止まらなかつたが、明久と共に前に出てきた彼?は 木下秀吉  
独特な言葉遣いで肩にかかるくらいの茶髪を纏つている。  
何処からぞ見よつと美少女、である。

「安心しなさい。達也なら三分したらすぐ治るわ」

「ま、待て優子!俺をそんな人じやないものと間違えるよつた事を言つな!」

「いや、彼が人じやないといつのは百も承知じやが……」

「くそつー! 一度曰だよこのオチ!...」

#### 閑話休題

「それで秀吉? じクラスの小山さんって知つてゐる?」  
「はて、誰じや?」

……「メントは控えよつ。なにか今更だ。

とつあえず合掌。アーメンっ! 南無三ツ札でもいいか。

廊下で死体になつた木下弟、その代わりに出て来たのは茶髪をボーネールにした少女　　島田美波だった。  
どうしてだろう?

彼女は優子と同じ雰囲気を纏つてる気がする。  
もちろん、俺に暴力を奮つ優子の……だが。

席に座り、置いてあつたお茶を啜りながらその試合を観戦する。  
あつ、このお茶熱いつ!?

結果はAクラス側の優子と佐藤さんの勝利。  
当然とは言え、クラスがどつと湧く。

そんなことより、俺は吉井が召喚獣を召喚する前に言つていた言葉  
が気になつていた。

「なあ吉井。そのネタ……もしかしてオンラインゲームで知つたなんて事……あつたりするか?」

ネタ、とはもちろん。『実は僕 左利きなんだ』のあれである。

「え……？ なんでそれを？」

やつぱりそ�だ！ 間違いない！！

観察処分者の宿命とも言えるフイードバックで頬を摩る吉井に聞いた事である考へが確信に変わった。

「あれって知り合いのプレーヤーから聞いた、とか？」

「うん。 せうだけど…… つてまさか！ ？ 劉さんつ！ ？」

「やつぱりAKHなんだ！」

わいわいと笑顔で喜び合つ二人。

客観的に見たら二人とも痛いアホである。

その後、負けたのに喜んでいた吉井明久はお亡くなりになつた。

『Aクラス 木下優子  
WIN 佐藤美穂

VS

Fクラス (木下秀吉)  
(DEAD) (吉井明久) LOSE 島田美波』

「では、一試合の方どうぞ」

「……（スック）」

あちらはムツツリー＝土屋か。なら……

チラリと愛子の方に視線を向けると、一つウインクを見せてから立ち上がった。

「じゃ、ボクが行こうかな。そつそつ、一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

そういうて笑顔でEクラスの面々に手を振る愛子。

「教科は何にしますか?」

「……保険体育」

「土屋君だっけ? 隨分と保険体育が得意みたいだね? でも、ボクだってかなり得意なんだよ?」

君とは違って、実技で、ね 「

愛子の問題発言は今更な気もする。

だから、この心のときめきは氣のせいで決して

「……変な事を考へてる頭はこの頭?」

「翔子つー? やめつー? ギブギブギブー? 頭がつー? 頭があああー! ?」

かつたら僕が教えてあげようか？ もちろん実技で

「ふつ。 望むところ

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「そりだそりだ！ 愛子、だったら俺に

メシツ

「…………」

「島田に姫路、それに達也 はいいか。 明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

いや、ちょっと、待つ！？ なんで優子がつ！？ グギヤアツ！？

「…………愛子、そろそろ」

「はーい。 試験召喚サモンつと

「…………試験召喚」

二人を小さくしたような召喚獣が、それぞれ武器を持つて現れる。ムツツリー＝土屋は小太刀の二刀流か。愛子は おお

そういえば愛子の召喚獣をはっきりと見るのは初めての気がする。Cクラス戦の時は俺の後ろで戦ってくれてたから。

「巨大な斧か」

「何だあの巨大な斧は！？」

達也の弦さとほぼ同時にFクラスの誰かからの声が上がった。  
愛子の召喚獣が持つのは体とほぼ大きさが同じ巨大な斧。  
あれでバイオなハザードでボスとして出てくるんですね。 分かります。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーー君」

彼女の召喚獣の腕輪が光り輝き、斧に雷光を纏わせながら田で追えないほどの速さでムツツリーー土屋の召喚獣に詰め寄り そして、そして剛腕で斧を振るう。

Aクラスの誰もが勝利を確信し、歓喜の声を上げようと

「…………… 加速」

した時、ムツツリーー土屋の腕輪が光り輝いた。

「……………え？」

誰が声をあげたのかも分からぬ。誰もが驚愕していた。  
なんで。なんでムツツリーー土屋の召喚獣は愛子の召喚獣の射程距離外に…………？

「…………… 加速、終了」

そして、ムツツリーー土屋の咳きに数瞬おいて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『 Aクラス 工藤愛子  
保健体育 446点

VS

Fクラス 土屋康太

572点』

「Bクラス戦では出来がイマイチだったからな

驚愕の声に包まれるFクラス側からそんな雄一の声が僅かに聞こえた。

「へ、そんな……。このボクが……。」

愛子のショックの声がはつきりと耳に入つてくる。

「…………愛子」「…………」

「『』、『』めぐ。達也君。負けちゃったよ

あはは、苦笑いで愛子はひきびいてきた。

「俺は……前も言つたけどコーダーって質じやねえから円並みなことしか言えないけど、愛子。お疲れさん。後は俺たちに任せてくれ

れ」

視線を翔子に向けると翔子は静かに頷いた。

「翔子ちゃん、達也君……。うん、ありがとう。後は頼んだよ!」

苦笑いとは違う笑みを見せた愛子はそれだけ言つと自分の席についた。

「やつにえは達也、私たちに労いの言葉は言葉は無いの?」

ふつと一息。

声の方を見れば優子と佐藤さんがひきびをていた。

「聞いてる？」

「ああ。聞いてるわ。お疲れ様、佐藤さん……それと優子」

「あ、ありがとうございます…」

「フフフフフ……」

嬉しそうにほほを緩ませた佐藤さんは対象に優子は怖い怖い笑みを浮かべていた。

今この時点で関節技をきめられなことには全俺が吃驚した。うん。

もしかしてなにか優子に異変が

ミシミシ

「…………優子？」

「変なこと考えたでしょ？」

「イイH、ソンナコトハナッ

」

前言撤回。やつぱり優子は優子だった。

『Aクラス

1

対

1

『Fクラス』

もう、これが俺達の戦争だ！（笑）（後書き）

はい、そんな訳で10話です。

最近は東方小説に取り組んでます。

興味のある方は読んでいただけると嬉しいです。

ハイハイ、宣伝乙

といつ事で前書きでも書きました通り執筆は続ける予定です。はい。

最後に拙作を待っていてくださった方、更新が遅れて大変すみませんでした。

それでは、また（^〇^）ノシ

おひるねをとるか寝るか…。(墨書き)

昨日投稿しよつと頑張っていたのですが、こんな時間になってしまって、  
ました(汗)  
しかも今日はと短いです。

「どうやらか、教科の選択をお願いします」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

衆前に立つた二人　久保利光と姫路瑞希　は呼びかけにも応じず無言で向かい合つていた。

なにも個人の勝負の為、教科を決めあぐねているのもあるだろうが、二人はそれとは違う　もつと重要な事が原因である。

ここで思い返してみよう。一試合目、ツーマンセルで行われたそれはAクラス側の教科の指定によつて行われ、圧倒的差でAクラスの勝利で終わつた。

二試合目、愛子とムツツリーーーーと土屋によつて行われたそれはFクラス側の教科の指定により行われ、皆の理解を追いつかせぬままFクラスの勝利で終わつた。

教科指定も勝敗も一対一。残る教科指定は一つである俺達Aクラス側としたら、あの優子が凄まじいと言つ彼……彼　葉王に教科の選択をさせるのは極めて不安だ。

それが分かつて久保君は、こうして姫路さんの痺れが切れるのを待つてゐるのだろう。

雄一が翔子に教科の指定を譲渡する事も考へられるが、それは普通なら軍の大将が白旗を振つたようなもの。クラスの大半は戦意が下がるに違ひない。ところがギッチヨン、あの雄一がそんな顯著に負けをクラスに認めさせるような行為はしないであろう。

敢えて言わせて貰えば、もしも（・・・）久保君が負けた場合に對

しての考察だ。

要するに、久保君が負けなければ良い。

「久保君、後の事は心配しなくて良い。勝て。それだけだ」

「フ。分かったよ。先生、総合科目でお願いします！」

「承認しました。召喚システム起動！」

高橋女史が腕を振るうと同時に、透き通った箱が一人を包んでいく。

『『試験召喚！』』

勝敗は一瞬で決した。

『Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

V/S

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるFクラスが」

ざわざわ騒ぎ立つAクラスの中にも響いてくる彼女の言葉。彼女に

負けた久保君は頭を

垂れて、地面に膝をついた。

おーおい。やつてくれるじゃないか姫路さん。  
まさかここまで点数を上げて来るなんて……。

ちらつとワイヤーと盛り上がるFクラスの面々を視界に捉える。

そこまでFクラスは素晴らしい居場所なのかい？

「追い詰められた……か」

「す、済まない」

「いや、久保君のせいなんかじゃ無いよ。むしろ、姫路さんの成長  
を把握出来ていなかつた俺の」

肩を落とす。

今更気付いた。この一敗がどちらも俺の慢心の責任だつて。翔子達  
の前で『油断するな』なんて言つた俺が油断するなんて、どんな皮  
肉だよ。

嘲笑う。浅はかだった自分を。

その時だった。

「……大丈夫だから」

「……翔子？」

頭に乗せられた手。彼女の手が俺の頭を優しく撫でていた。

「……大丈夫。私達なら絶対勝てる。だから

そんな悲観しちゃ駄目。

俺の頭から手を離し、翔子はゆっくりと振り返り、高橋女史の待つ  
クラス中央へ歩き始めた。

その綺麗な黒髪を揺らし、遠くなつていく彼女に俺は視線を釘付け  
にされた。

頭に手を置く。

考えてる事も、お見通し、か。

口元が緩むのを感じる。

彼女だからなのか、それとも自分を知つてくれていたからなのか。

俺は歩いていく彼女を静かに見つめていた。

「優子ちゃん、コーヒー取りに行かない力ナ?」

「そうね。私もちょうど飲みたかったところなのよ。」

「僕も同行させてもらひつよ。僕も飲みたいんだ。ブラックコーヒー自然にデレるなんて……。流石にボクでも突っ込めなかつたよ」

「あ、愛子。私も砂糖いらないわ。……飲めないけど」

「…………（僕も吉井君と…………）」「

「翔子……」

周りでの「コーヒー豆の消費が激しいことも気づかず、達也は静かに彼の理解者であり想い人の名を呟いていた。

ふわりと彼女の見た目麗しい黒い髪が窓から入ってきた風に流れた。

「…………高橋先生」

「分かりました。Fクラスの次の方、出てきてください」

Fクラスの中で頭一つ抜けた赤い髪の少年が立ち上がる。

やはり、雄一か……。

分かつていたものの、俺は葉王か。追い詰められている以上、納得はしたくないが。

「教科はどうしますか？」

残り一試合。Aクラス側に教科指定権は無い。

高橋女史の視線は雄一に向かっていた。  
そして、雄一は口を開く。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

その言葉に心が揺れた。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確定じやないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

違う。やつじやない。雄一は翔子の

「どうしたの達也？　凄く恐い顔して。らしくない」  
「そ、そうか……？」  
「そうだね。トラウマに遭つたみたいな顔しててるよ」  
「…………」  
「「？」？」

黙ってしまった達也に、優子と愛子は顔を見合させる。  
その場には既に雄一と翔子の姿は無い。ただ彼らが映るモニターが  
眼前で瞬いていた。

『不正行為は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『では、始めてください』

二人がほぼ同時に問題用紙を表返す。

愛子と優子も達也の視線の先　モニターへと視線を向ける。

(　　)年　大宝律令  
(　　)年　平城京に遷都  
(　　)年　平安京に遷都  
(　　)年　鎌倉幕府設立

何も問題は無い。簡単な問題の数々。そんな中に、それはあった。

瞬間、Fクラス側がざわつきはじめる。

そして、結果は出た。

『日本史勝負』　限定テスト　100点満点

『Aクラス 霧島翔子 97点』

翔子の点数に、Aクラスのほぼ全員が顔を見合せた。といろどりから啼めの声も聞こえる。

そして、

『Fクラス 坂本雄二 53点』

それは歓喜の声に変わつた。

「良かつたあ。翔子ちゃんの点数を見た時は少し負けを意識しちやつたよ」

「そうね。でもあの程度の問題でどうして間違えたのかしら？」普段の翔子だったら満点でしょうに。坂本が何かしたのかしら？」「何か知ってる、達也君？」

「あ、ああ、あれは

告げられていく雄一と翔子の過去。本人達 特に雄一が居たら  
顔を赤くしてしまっただろうそれに、気づけばFクラスAクラス問わ

ず、皆が耳を傾けていた。

その話には達也の存在は見受けられなかつた。ビリヤー達也も言伝に聞いたものであるらしい。

たまに内容がぼけているものもあつた。

「坂本も粋な事をしてくれるわね。翔子の真っ直ぐさを手に取るような事して……。……今度秀吉に化けて毒でも盛りつけらるかしら?」

「…………」「…………」「…………」

「どうしたの一人とも? 突然黙つて。冗談に決まってるじゃない」

優子が言つと冗談に聞こえないのは何故なんだ?

達也さんのベストアンサー

普段が暴力的過ぎるからで、『イタイイタイギブギブッ!…?』

「まつたく……やつと少し戻つたわね」

「へ?」

「うん。今もまだ酷いけどさっきまでは死んだ魚みたいな顔をしてたんだよ?」

「そ、そうなのかな?」

自分の頬を撫でてみるが、それで分かつたなら苦労はしない。

「そうね。私が弄られやなきゃならないのは少し釈だけど、今回だけは許してあげるわ」

今回だけはを強調する優子。自然と自分の頬が緩むのを感じる。

「でも、朝倉さんに負けたら優子は許すのかな？」

「あ、愛子？ そういうのは言わない約束だ」

「うう。負けたら最近の雑誌に書いてあつた駅前のアイス屋でも奢って貰おうかしら」

まあ、体罰が無いなら

「それと骨を一・三本と」

「なに！？ 僕は悪魔とでも契約するの！？」

「私が悪魔だつて？」

「イイエ。ソシナコト申して無いでござる」

そういえば、学年が上がってからずっとこんな漫才をしてた気がする。

今更じゃん。なんて笑われるかもしれない。だけど、それを思い出さないくらい、このAクラスでの毎日は充実していたんだ。だからやるやつ。この日常を。戦おう。守るために。俺はまだ、戦える！

To be continued

なんて心の内で考えてみたり。うわー、無いわ  
だけど、こんな日常が楽しい。これは本当だ。

そんな日常。例えピースが一つ欠けたとしても、失くなつて欲しくは無いや。

「……達也」

背後から声が聞こえた。足音も僅かにだが確實に大きくなつてくる。

「……翔子か？ 戻つて来てたんだな。お疲れ様」

「……うん。頑張つて」

「ああ」

「行つてきなさい」

「頑張つてね」

「へへッ。Aクラス、五十嵐達也。行つきま～す！！」

翔子に続いて、側に居た二人からも見送られながら俺は席を立ち、一步前へと踏み出した。

#### 『AクラスVSFクラス

（おもてなしの心をもつて。）（後書き）

はつやつとした感じで、達せの気持ちは半透明になってしまって書きました。  
詳しへのり書いていくつもりです。

それではまた（^○^）ヘシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9602s/>

バカとテストと召喚獣～異常者と転生者と？～

2011年11月12日05時41分発行